

比 恵 27

—比恵遺跡群第62次、第63次、第65次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第595集

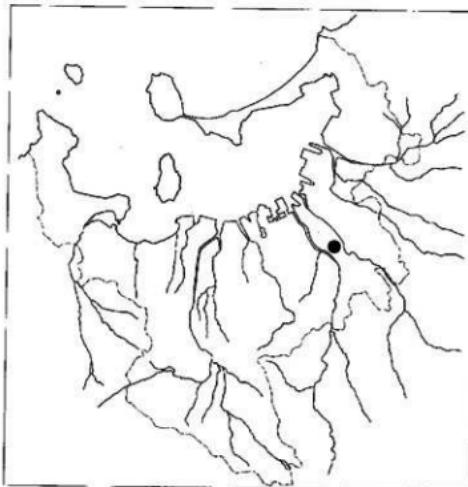
1999

福岡市教育委員会

比 恵 27

—比恵遺跡群第62次、第63次、第65次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第595集



遺跡略号 HIE-62・HIE-63・HIE-65
遺跡調査番号 9720・9739・9772

1999

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しています。本市では文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書はそうした遺跡のひとつで、1997年度に博多区比恵遺跡内の各種開発事業に先だって行った発掘調査成果の報告書です。

発掘調査の結果、それぞれの調査地点から、弥生時代から古代にわたる遺構、遺物が見つかりました。比恵遺跡は從来より福岡市有数の大遺跡として知られており、その様相を更に明らかにする上で、今回の調査は多人な成果を挙げることができました。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた九州マサル工業株式会社、坂井清敏様、堤商事様を中心とする多くの関係者の方々に対し、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

目 次

62次調査

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 調査の記録	3
1. 調査の記録	3
(1)概要	3
(2)住居跡	3
(3)溝	11
(4)井戸、土壙ほかの遺構	16
(5)各遺構出土石、金属、土製品	22
2. 小結	23

挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡62次調査地点(1:4000)	1
Fig. 2 調査区位置図(1:500)	2
Fig. 3 調査区遺構配図(1:200)	3
Fig. 4 円形住居跡実測図(1:80、1:60)	5
Fig. 5 方形住居跡実測図 1(1:60)	7
Fig. 6 方形住居跡実測図 2(1:60)	8
Fig. 7 住居跡出土土器実測図 1(1:3)	9
Fig. 8 方形住居跡実測図 3(1:60)	10
Fig. 9 住居跡出土土器実測図 2(1:3)	11
Fig. 10 溝実測図(1:200、1:40)	12
Fig. 11 溝出土土器実測図 1(1:3)	14
Fig. 12 溝出土土器実測図 2(1:3)	15
Fig. 13 井戸 1 実測図(1:60)	17
Fig. 14 井戸 1 出土土器実測図 1(1:3)	18
Fig. 15 井戸 1 出土土器実測図 2(1:4)	19

Fig.16	甕棺墓11実測図(1:20、1:3)	20
Fig.17	土壤実測図(1:20、1:40)	21
Fig.18	土壤出土土器実測図(1:3)	22
Fig.19	石、金属、土製品実測図(1:2、1:1)	23
Fig.20	時期別遺構分布図(1:400)	24

図版目次

PL. 1	(1)調査区西半区全景	(2)調査区東半区全景(南から)
PL. 2	(1)住居跡8(北から)	(2)住居跡16、20
PL. 3	(1)住居跡4、5、6(北から)	(2)住居跡5、6土層(北から)
PL. 4	(1)住居跡4遺物出土状況(東から)	(2)住居跡4遺物出土状況(西から)
PL. 5	(1)住居跡24(西から)	(2)遺構42(南から)
PL. 6	(1)溝30、遺構31、35(南から)	(2)耳環出土状況(東から)
PL. 7	溝2、9、10、12、13、14、17	
PL. 8	(1)溝2遺物出土状況(北から)	(2)溝32、33、13(東から)
PL. 9	(1)溝33遺物出土状況(東から)	(2)溝33遺物出土状況(西から)
PL.10	(1)溝13遺物出土状況(南から)	(2)溝13屈曲部遺物出土状況(南から)
PL.11	(1)溝13遺物出土状況(西から)	(2)甕棺墓11(北から)
PL.12	(1)井戸1(北から)	(2)井戸1土層(西から)
PL.13	(1)井戸1遺物出土状況(西から)	(2)土壤15(東から)
PL.14	(1)土壤27(東から)	(2)土壤34(西から)

63次調査

本文目次

I.はじめに	39
1. 調査に至る経緯	39
2. 調査体制	39
II. 調査の記録	41
1. 調査の記録	41
(1)検出遺構	41

(2)出土遺物	44
2. 小結	52

挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡63次調査地点(1:4000)	39
Fig. 2 調査区位置図(1:500)	40
Fig. 3 調査区遺構配置図(1:100)	42
Fig. 4 各遺構土層図(1:40)	43
Fig. 5 溝断面図(1:40)	43
Fig. 6 井戸13、14実測図(1:40、1:20)	43
Fig. 7 各遺構出土土器実測図(1:3)	44
Fig. 8 井戸13出土上器実測図1(1:3)	45
Fig. 9 井戸13出土土器実測図2(1:3)	46
Fig. 10 井戸14出土土器実測図1(1:6、1:3)	48
Fig. 11 井戸14出土土器実測図2(1:3)	49
Fig. 12 井戸14出土土器実測図3(1:3)	50
Fig. 13 出土土器実測図(1:2)	51

図版目次

PL. 1 (1)調査区西半区全景(南から)	(2)調査区西半区全景(北から)
PL. 2 (1)道路状遺構2(南から)	(2)道路状遺構2土層(北から)
PL. 3 (1)道路2、溝1土層(北から)	(2)溝土層(北から)
PL. 4 (1)調査区東半区全景(北から)	(2)調査区東半区全景(南から)
PL. 5 (1)住居跡状遺構(東から)	(2)住居跡状遺構9遺物出土状況(東から)
PL. 6 (1)ピット142遺物出土状況(東から)	(2)井戸14(東から)
PL. 7 (1)井戸14上部遺物出土状況(北から)	(2)井戸14下部遺物出土状況(東から)
PL. 8 (1)井戸14上層(西から)	

65次調査

本文目次

I. はじめに	61
---------	----

I. 調査に至る経緯	61
2. 調査体制	61
II. 遺跡の位置と環境	62
III. 調査の記録	63
1. 調査の概要	63
2. 遺構と遺物	63
(1)調査区土層	63
(2)検出遺構	63
(3)出土遺物	65
3. 小結	66

挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡65次調査地点位置図(1:1000)	62
Fig. 2 調査区遺構配置図(1:50)	64
Fig. 3 S D01、S D02上層断面図(1:40)	65
Fig. 4 S K01、S K03遺構実測図(1:40)	65
Fig. 5 出土土器実測図1(1:4)	67
Fig. 6 出土上器実測図2(1:4)	68
Fig. 7 出土石器・土製品実測図(1:2)	69

図版目次

PL. 1 (1)調査区南西側全景(北東から)	(2)調査区北東側全景(南西から)
PL. 2 (1)S D01AA' セクション上層堆積状況	
(2)S D01BB' セクション土層堆積状況	
(3)S D02(北西から)	(4)S D02CC' セクション土層堆積状況
(5)S D02DD' セクション土層堆積状況	
PL. 3 (1)S K01(南から)	(2)調査区北西壁土層堆積状況
(3)調査作業をされた方々	
PL. 4 出土遺物	
PL. 5 出土遺物	

比恵遺跡群第62次発掘調査報告

遺跡略号 HIE-62
遺跡調査番号 9720

例　　言

1. 本章は社屋建設に先だって、福岡市教育委員会が1997年6月9日～8月29日にかけて行なった比恵遺跡第62次調査の報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡1、溝2のように記述する。
3. 本章で使用する方位は磁北である。
4. 本章で使用した遺構実測図は宮井善朗、井上蘭子、中暢子、小沢佳憲が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
5. 本章で使用した遺物の実測図は宮井の他中暢子、荒川直子、中河秀崇が作成した。また製図は林由紀子の協力を得た。
6. 本章使用の写真は、空中写真を（株）空中写真企画、そのほかは宮井が撮影したものである。
7. 遺物実測図の番号は収藏時の登録番号に一致する。
8. 本調査に關わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで收藏、管理があるので、活用されたい。
9. 本章の執筆、編集は宮井が行なった。

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1997年3月6日付けで、株式会社志機より、売却予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である比恵遺跡内に位置しており、遺構の存在が予想されることから、埋蔵文化財課では審査願いを受けて97年3月24日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構が良好な状態で検出された。申請地は九州マサル工業株式会社が買収し、事務所および倉庫を新築するとのことであり、申請地全般が予定建築物によって破壊される状況であった。そこで試掘成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される敷地全域を対象として発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、建築事業主体者である九州マサル工業株式会社との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうことになった。調査は1997年6月9日に着手し、8月29日に終了した。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝 (調査年度) 柳田純孝 (整理年度)

第2係長 山口譲治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 浅原千晶(調査年度) 河野淳美 (整理年度)

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 小沢佳憲(九州大学) 野村道夫 楠林司朗 森田祐子 古賀典子 持丸玲子 緑川ゆかり
石川洋子 鶴山治子 坂本俊子 穴井加菜子 馬目真吏

整理作業 中暢子 大石加代子 林由紀子

また調査時には九州マサル工業には条件整備等で多くのご配慮を賜ったうえ、工期延長など多大のご迷惑をおかけした。記して感謝申し上げるとともに、深くお詫び申し上げる次第である。また調

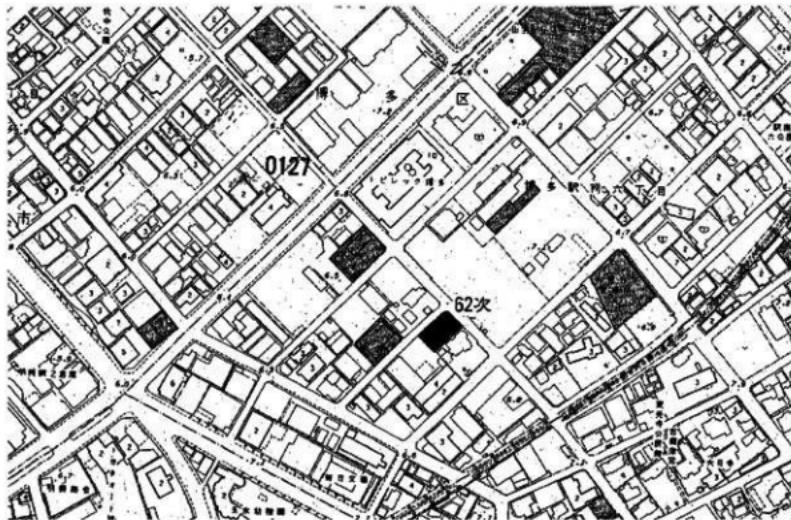


Fig. 1 比恵遺跡62次調査地点 (1/4,000)

査中には井上蘭子氏、吉留秀敏氏、久住猛雄氏を始め多くの方々の協力、助言を得た。深く感謝するとともに本報告に十分生かせていないことをお詫びする次第である。

遺跡調査番号	9720	遺跡略号	HIE-62
調査地地番	福岡市博多区博多駅南6丁目25-1		
開発面積	555m ²	調査対象面積	555m ²
調査期間	1997年6月9日~8月29日		
	分布地図番号 37-0127		



Fig.2 調査区位図 (1:500)

II. 調査の記録

1. 調査の記録

(1) 概要

比恵遺跡62次調査地点は、遺構が極めて密に遺存しており、調査に非常に手間取った。予定調査期間を一月以上超過したのもそのためである。今回調査では弥生時代の円形住居、古墳時代の方形住居、溝、古代の井戸などが検出された。また調査時の座標としては、調査区に最も近く、地割りに平行する人孔2点を用いた。調査日誌に従い、調査経過を略述しておく。

6月9日に機材搬入、表土剥ぎを行ない、調査を開始した。廃土は場内で処理するため、西半分から調査を始めた。遺構の切り合いか審しく、検出に苦労したが、いくつかの遺構群に分け、遺構の形状を想定しながら掘り下げを行なった。7月26日にはほぼ完掘し、7月31日に気球による全景撮影を行なった。8月1日に実測図の補足を行ない、8月3日に調査区を反転した。遺構の密度、遺存度は西側と同様であった。8月26日にはほぼ完掘し、27日に全景撮影を行なった。その後補足的な調査を行なって29日に終了し、同じ町内の63次調査地点へ移動した。

(2) 住居跡

住居跡は円形住居3基、方形住居は、可能性のあるものをすべて含めると13基検出した。円形のものは弥生時代、方形のものは古墳時代前期に属するものと、後期に属するものがある。円形住居、古墳時代前期の方形住居、後期の方形住居の順に述べる。

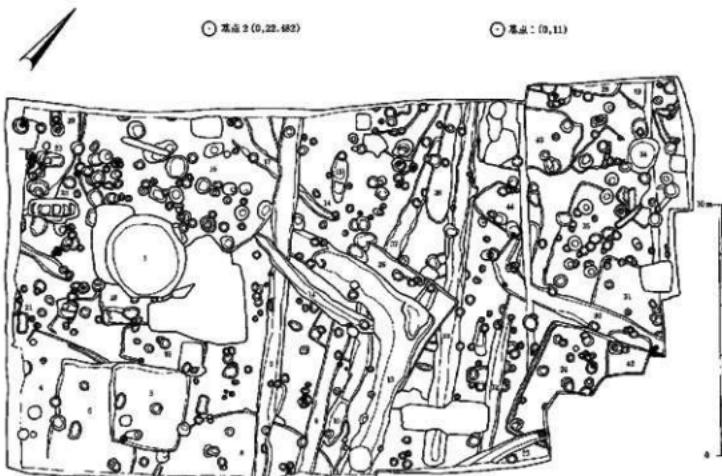


Fig.3 調査区遺構配置図 (1/200)

住居跡8 (Fig. 4)

調査区の南西端で検出した。溝2、9、住居跡5、壺形墓11に切られる。径7.5m程に復元されよう。主柱穴は特定できない。南西端に一部壁溝が認められる。検出面からの深さは20cm程である。

出土土器 (Fig. 7)

25は弥生土器の甕である。口縁部は厚く、断面逆三角形の逆し字状を呈する。外面にハケメが認められる。26は壺底部である。厚く安定した平底で、胴部は外反しながら立ち上がる。内外面ナデ調整される。27は小型の鉢である。内湾しながら緩やかに開く体部を持ち、口縁部は肥厚させて、ヨコナデによりわずかに凹ませる。底部は上げ底で、内底部に指頭痕がみられる。

住居跡16 (Fig. 4)

調査区の北西端で検出した。井戸1、溝2に切られる。また切り合い関係は明瞭ではないが、溝12、溝14(17)にも切られると考えられる。径8mを割り、比較的規模が大きい。遺存は悪く、よいところでも20cm程である。床面にはピットが多く検出され、主柱穴の特定は困難であるが、6ないし8本と思われる。断面図の中央に示した上塙が中央土塙と考えられる。床面からの深さは40cm程である。また主柱穴と思われるピットは床面からの深さ50~80cmを測る。

出土土器 (Fig. 7)

47は壺底部である。厚い上げ底状を呈する。外面はハケメを施す。48は壺底部である。安定した平底で、体部はわずかに外反しながら立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

住居跡20 (Fig. 4)

住居跡16の西側で検出した。全体の1/6ほどしか検出されていない。径は8mほどであろう。遺存は悪く30~40cm程である。床面には30cm~50cmほどのピットが多数あり、主柱穴の特定は困難である。図示したのは一案である。住居跡16との間隔は最も接近したところで10cmに満たず、同時に併存は考えにくい。

出土土器 (Fig. 7)

50は弥生土器の底部である。甕であろうか。底部はやや不安定な平底で、体部は直線的に立ち上がる。

以上の円形住居跡はいずれも弥生時代中期に属するが、住居跡16と20が近接しているように、少なくとも二期にわたるものと考えられる。出土遺物が少なく、遺物から判断するのは困難であるが、住居跡8と16がほぼ同時期で中期前半~中頃、20がやや遅れて中期中頃~後半頃と思われる。

住居跡4 (Fig. 5)

調査区の南西端で検出した。住居跡5、6と切り合い関係にあり、最も先行する住居のようである。北辺と西辺のそれぞれ一部しか検出されておらず、規模は不明である。北辺の一部に壁溝が見られる。主柱穴は特定できない。固化に耐える遺物は川土していない。

住居跡5 (Fig. 5)

円形住居跡8の西側で検出した。住居跡6、8を切る。遺構19との切り合いは不明であるが、住

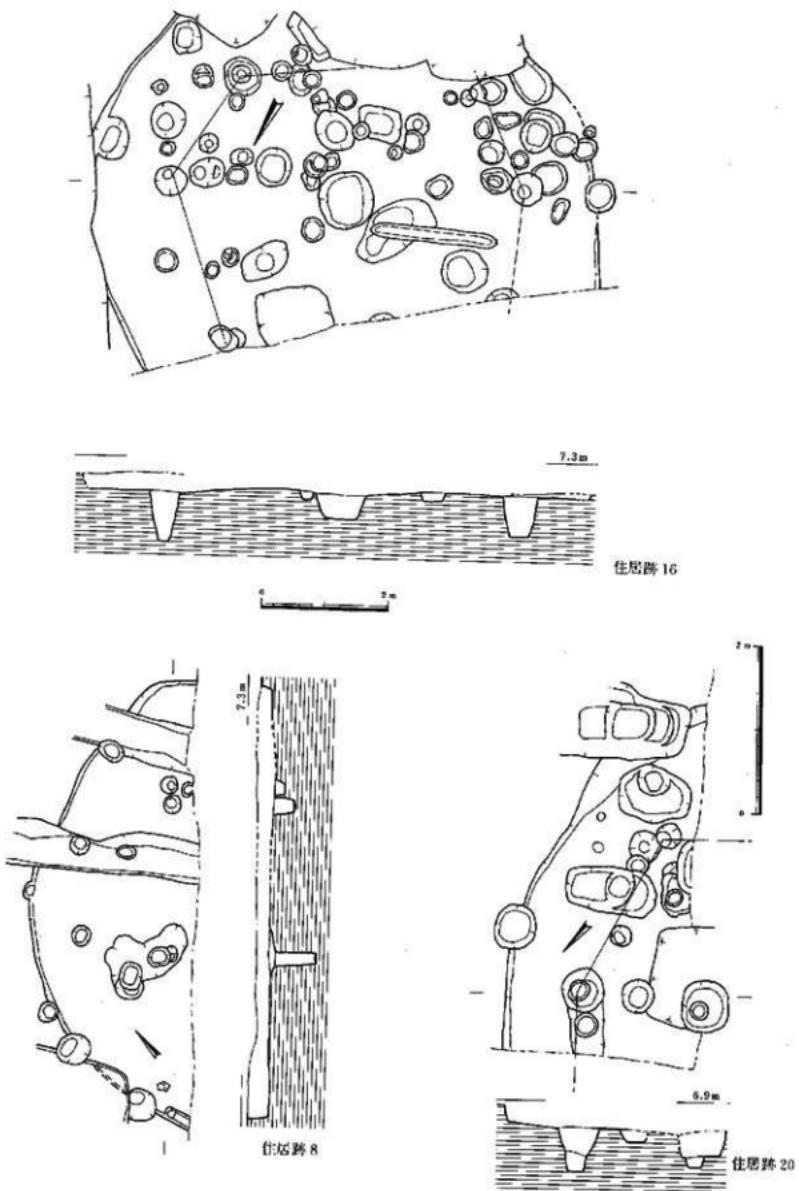


Fig.4 円形住居跡実測図 (1:80, 1:60)

居跡5が後出するようである。一辺2~2.2m程のほぼ方形を呈する。遺存は、検出面からの深さ20~30cm程である。床面にはピットが少なく、主柱穴は認められない。西壁の中央に楕円形の土壙(土壙108)があり、住居に伴う施設と考えられる。床面からの深さは20cm程である。

出土上器 (Fig. 7)

18は壁際の楕円形土壙108から出土した土師器の甕である。口縁部は直線的に開き、外面が厚みを増して丸みを帯びる。屈曲は緩やかで、内外面とも稜が立たない。口縁端部は外傾する坦面をなすが、曖昧で若干丸みを帯びる。胴部内面には削りを施す。

住居跡6 (Fig. 5)

住居跡5の西側に位置する。住居跡4を切り、5に切られる。南辺が調査区外に出ていることを考慮すれば長方形に復元されよう。東西は約2.2m、また西壁際の土壙101がほぼ壁の中央にあると想定すれば、南北は4.2m程になろう。遺存は悪く、検出面からの深さは10~20cm程である。土壙101は住居に伴う施設と考えられ、周囲に比較的多くの遺物が出土している。床面からの深さ20cm程である。南側に隣接して粘土塊が見られる。竈のような施設であった可能性もある。但し焼土、炭などは認められない。

出土土器 (Fig. 7)

19、20は土壙101の北側の床面に、壁に接して据えられたような状況で出土したものである。19は丸底の甕であるが、頸部以上を打ち欠いて、無頸甕のような器形にしている。胴部は偏球形を呈する。内面には目の細かいハケメが認められる。20は直行する頸部を持つ甕であるが、同様に頸部以上を打ち欠く。胴部は偏球形を呈し、底部はわずかに尖り気味になる。外面は丁寧なナデ、内面にはハケメが見られる。21~23はほぼ同形の甕であるが、口径はわずかにつつ異なる。内外面ともナデ調整である。24は甕である。口縁部は緩やかに屈曲して開き、屈曲部は稜が立たない。口縁部はわずかに内湾する。端部は外傾する坦面を持つ。

住居跡4~6は住居4→6⇒5の順に作られたものであるが、時期的には大きな差はなく、いずれも古墳時代初頭頃に属するものである。

住居跡18 (Fig. 6)

住居跡4~6の北側で検出した。南辺、西辺の一部のみの検出である。床面に段が多く、更に複数造構が重複している可能性もある。住居跡19を切るようである。出土遺物はFig. 7に図示したもののはか弥生土器が主体を占めるが、平面形から見て古墳時代初頭の可能性も否定できない。

出土上器 (Fig. 7)

49は弥生土器の甕である。口縁はほぼ水平で、逆し字状を呈する。胴はあまり張らない。外面にハケメが認められる。

住居跡19 (Fig. 6)

住居跡5と18の間に位置する。西辺は住居跡18のすぐ南側で終わるようで、東西2.2m、南北1.2m程の長方形を呈する。住居としてはやや小さく、別の性格の造構かもしれない。出土遺物は固化に耐えないが、古式土師器片なども含み、これを切る住居跡18が該期まで下がることの傍証を窺わせている。

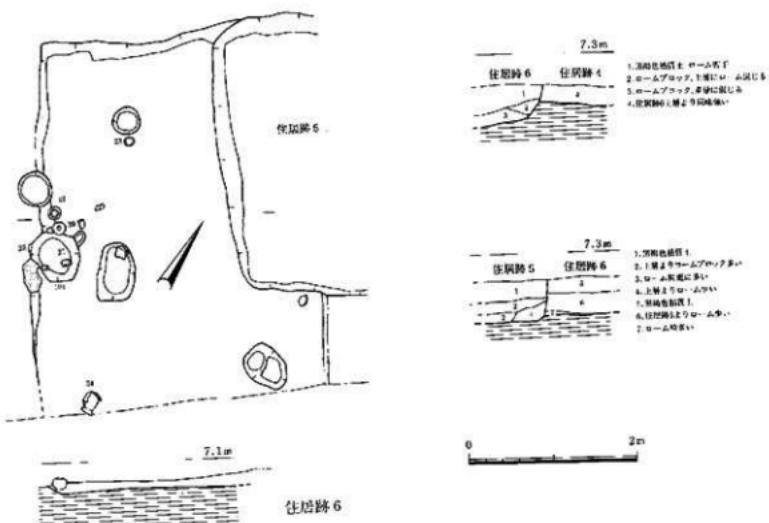
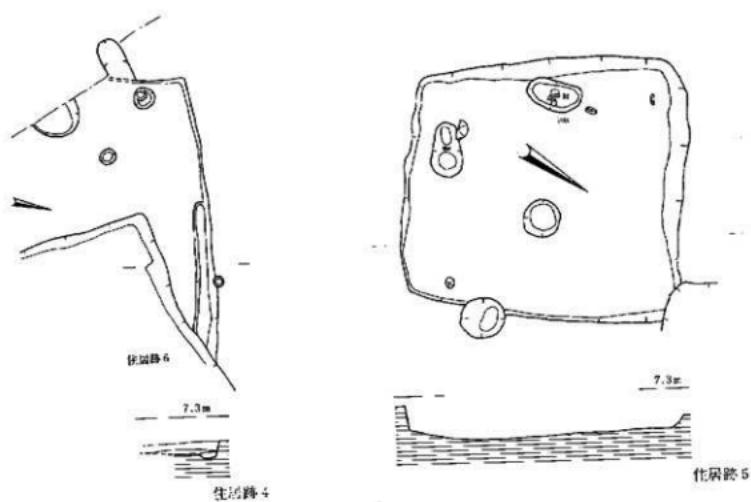


Fig.5 方形住居跡実測図1 (1:60)

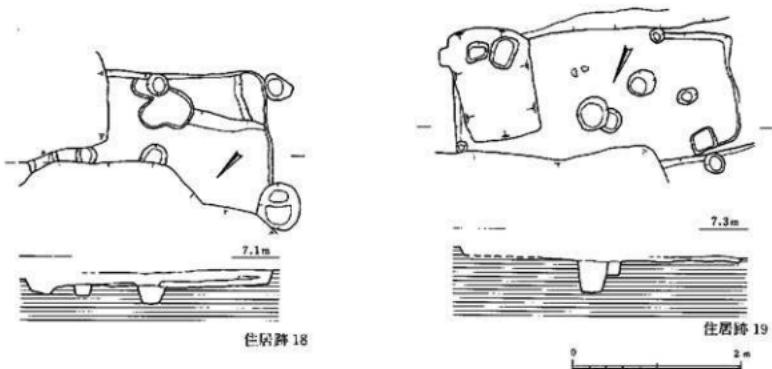


Fig.6 方形住居跡実測図2 (1:60)

住居跡24、造構42 (Fig. 8)

住居跡24は調査区の南東隅で検出した。溝25に切られ、溝30を切る。平面形は方形と考えられ、一辺4.5m程度である。西辺と南辺に壁溝が巡る。床面からは多くのビットが検出されたが、断面図に示したもののが比較的深いもので、これから想定すると四本柱となろう。出土遺物は、Fig. 9に図示したものを含め、弥生土器も多いが、少量ながら須恵器も合んでおり、後述する造構42との関係からも古墳時代後期の住居跡と考えられる。

造構42は住居跡24、溝30の床面で検出した。方形または長方形と思われ、住居とするには規模が小さく疑問である。

出土土器 (Fig. 7, 9)

51は弥生土器の甕である。口縁部はほぼ水平である。肩部は若干張るようである。外面に目の粗いハケメを施す。52は壺の底部であろう。安定した平底で、若干突出気味になる。体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。体部外縁は丹塗を施す。外底部にはハケメを施す。70は造構42出土の十脚器二重口縁甕の口縁部である。口縁部は大きく開く。肩部は外面は垂下する尖塔状を呈し、内面は境界が曖昧である。肩部直上に櫛描きの波状文を巡らせ、二つ重ねの円形浮文を一個一単位として貼付る。

住居跡26 (Fig. 8)

調査区のほぼ中央で検出した。遺存は悪く10cmに満たない。中央部を溝12、13と重複するが、先後関係は不明である。調査時の印象では住居26の床面を出すまで各溝同士の輪郭、切り合いが判明しなかったことなどから住居26が溝を切るのはないかと思われる。ほぼ一辺4.3mの方形を呈する。壁溝、主柱穴、竈など付帯施設については明らかでない。

出土土器 (Fig. 9)

図示したものはいずれも須恵器である。55は壺蓋である。口径に比して器高が高い。天井部は平たく、回転ヘラ削りを施す。十字形のヘラ記号を持つ。口径12cmを測る。56は壺蓋である。天井部は丸みを帯び、回転ヘラ削りを施す。口径13cmを測る。57は壺蓋である。口径16cmとやや大きい。口径端部は内傾する壺面を持つ。口径は直線的で、体部との境界に沈線状の段を持つ。59は壺である。口径13.5cmを測る。口径部は薄く、外反しながら内傾する。受け部付け根が回転ナデにより沈線状

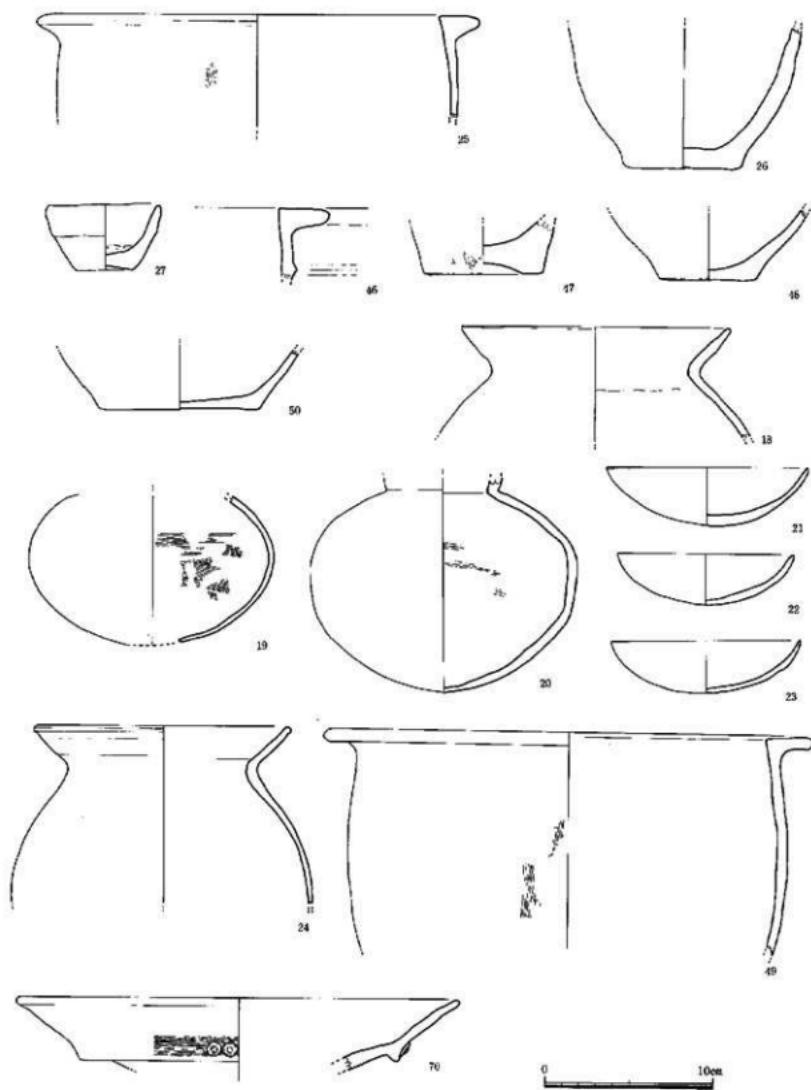
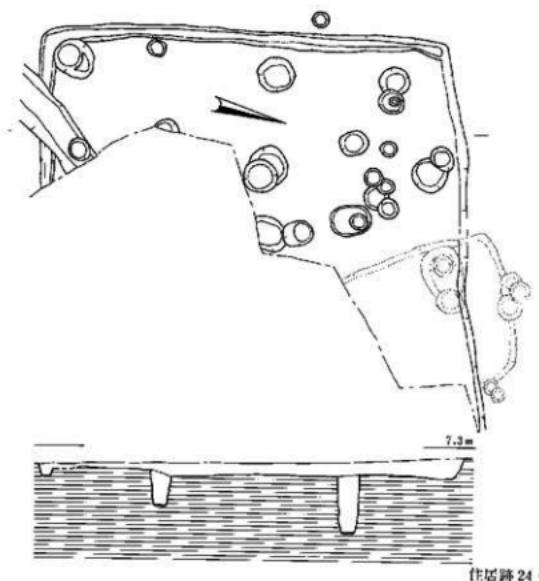
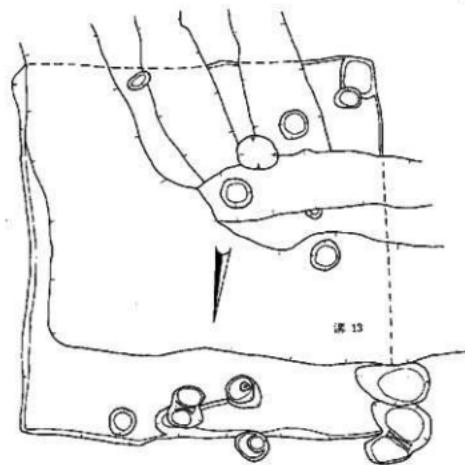


Fig.7 住居跡出土土器実測図1 (1:3)



住居跡 24・42



住居跡 26

Fig.8 方形住居跡実測図3 (1:60)

に凹む。58は小型の短頸壺である。口縁部は短く、わずかにすぼまる。肩部は撫で肩で、口縁部付け根の直下に梯巻きの波状文を巡らせる。胴部外面はカキメを施した後ナデ消している。60は短頸壺である。口縁は外反しながら大きく聞く。端部は垂直に坦面をなす。外面は撒格子叩きを施した後上半をカキメで消す。内面も胴部上半まで回転ナデを施す。

住居24、26は古墳時代後期と考えられる方形住居で、古墳時代初頭のものと比べて、規模が大きく、形態も整美といえる。この他に該期の住居の可能性があるものとして、造構35、31、28、29などがある。

(3) 溝

溝は時期不明のものも合わせると10条検出した。時期の明らかな溝は弥生時代後期終末、古墳時代初頭、古墳時代後期に集中している。主なものについて述べる。

溝2、溝33 (Fig. 10)

溝2と溝33はほぼ平行する溝で、幅、断面形も類似している。当初から計画的に平行して掘削された溝と考えられる。幅は70~80cm、深さは検出面から30~40cmを測る。溝33の方は調査区南東端付近で立ち上がる。陸橋部となる可能性もあるが、溝2には対応する箇所はない。覆土を見ると、底部付近に自然堆積と思われる縮まりのないシルト層が見られる（5層）が、ほかの溝との切り合い関係、出土遺物から見て、掘削から埋まるまでの期間はそれほど長いものではなかったようである。

出土土器 (Fig. 11)

出土遺物の大半は最上層から出土している。14は上前巻甌である。口縁は直線的に開き、端部は磨滅で不詳ではあるが、外傾する坦面を持つようである。屈曲は緩やかで棱は立たない。外面にはハ

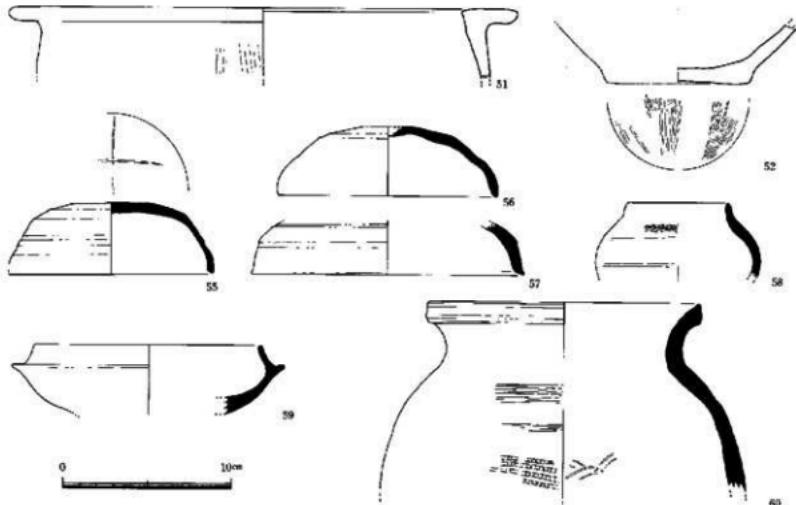
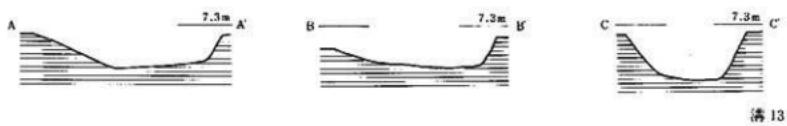
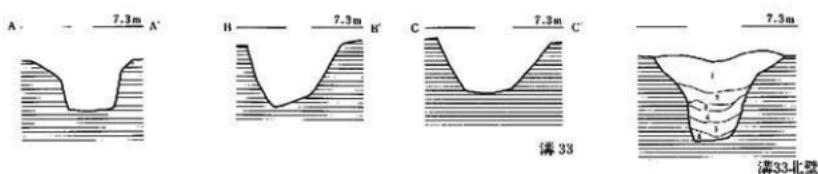
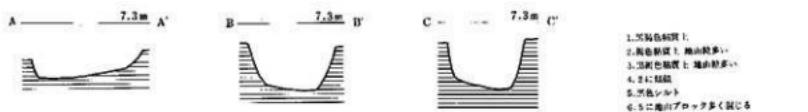
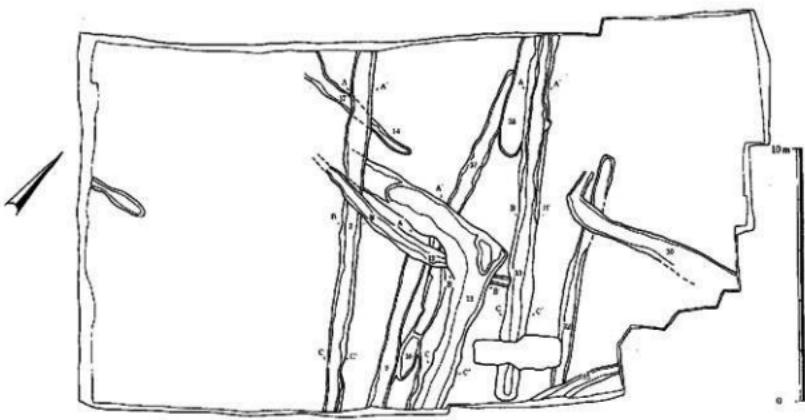


Fig.9 住居跡出土土器実測図2 (1:3)



0 1 m

Fig.10 溝実測図 (1:200, 1:40)

ケメが認められる。15は広口壺である。口縁は外反しながら大きく開く。器壁は厚い。内外面にハケメを施す。16は小型丸底壺である。口縁はわずかに開く。磨滅のため調整は不明。17は平底の鉢である。法量の割に器壁が厚い。外面にハケメを施す。弥生土器であろう。以上は溝2出土土器である。

62は弥生土器の大型甕口縁部である。口縁部はほぼ水平で、内側に突出する。腹部がかなり張る。II縁部下位に断面三角形の突帯を一条巡らせる。63は土師器の二重II縁壺である。口縁部は直線的に大きく広がる。端部は外傾する坦面を持つ。頸部は緩やかにそぼまる。器面の荒れがひどく、調整は不明。頸曲部は内外面とも稜が立つ。64は頸部が直立する壺である。胴部は偏球形を呈する。内外とも比較的丁寧なナデで仕上げる。65は大型の壺もしくは壺底部である。底部は厚く安定した平底である。体部はわずかに外反しながら大きく開く。外面は日の糸い叩きが施されており、底部付近は右下がり、その上位はほぼ水平方向である。以上は溝33出土遺物である。

この他溝2、溝33と相前後する時期の溝として、溝9、10、37、32等が考えられる。溝10、溝9は切り合い関係にあり、10が先行するようである。溝37は溝10の延長と考えられる溝で、遺構38を介して、溝33に先行する。溝32は溝30、25に切られる。方向は溝9とほぼ平行する。

F i g. 11の71は溝10出土の複合口縁壺の口縁部である。推定口径50cmを越える大型品である。口縁部は外傾しながら伸び、肩曲部は緩やかである。端部は坦面を持つ。頸部外面にはハケメを施す。器壁も厚い。69は溝37出土の弥生土器の壺底部である。外側に踏張る上げ底状を呈する。外面にハケメを施す。61は溝32出土の弥生土器の複合口縁壺である。口縁部はわずかに内湾しつづばまる。端部はわずかに拡張しながら坦面をなす。肩曲部は外面には坦面、内面には稜を持つ。肩曲部直下には指押え痕が認められる。頸部は付け根から直ちに大きく広がる。付け根には断面三角形の突帯を一条巡らせる。

以上の切り合い関係と出土遺物から見て、弥生時代後期後半頃から溝の掘削が行なわれ、終末なし古墳時代初頭には平行する溝2、33が掘削され、ほどなく埋められていると考えられる。

溝13 (F i g. 10)

調査区のはば中央に位置する。住居跡26と切り合う付近で西側へ折れるL字状を呈する。幅は1~1.5m程である。西端は不明瞭で、溝2と重複する付近で浅くなり、住居16まで伸びるかどうか明らかでない。

出土土器 (F i g. 12)

29~36は須恵器、37~39は土師器である。29~31は壺蓋である。29、30はともに天井部が丸みを帯び、回転ヘラ削りを施す。口縁部との境は不明瞭で、口縁端部は丸く納める。31はII縁部が肩曲し、肩曲部から大穴にかけてヘラ削りを施す。天井部にはつまみが剥離したような痕跡が見られる。口縁端部は外側へ短く肩曲させ、薄く仕上がる。天井部内面に同心円文の当貝痕が見られる。口径は29が14cm、30が14.8cm、31が16cmである。32~34は壺身である。口縁部はわずかに外反しながらすぼまり、端部は薄く仕上がる。底部から1/3程まで回転ヘラ削りを施す。口径は32が11.9cm、33が12.4cm、34が12cmである。35は甕である。頸部より上部を欠く。肩部に斜格子文、胴部に波状文を描く。波状文の下位にはカキメが施され、底部には回転ヘラ削りを施す。36は提瓶である。口縁部は大きく開き、把手は半環状を呈する。胴部凸面はカキメ、平面には回転ヘラ削りを施す。内面は回転ナデ調整である。37~39は土師器である。37は小型の甕。口縁が短く脇が張る。38は小型の壺、底部は厚い。手づくねで、外面に赤色顔料が認められる。39は甕である。完品で出土した。

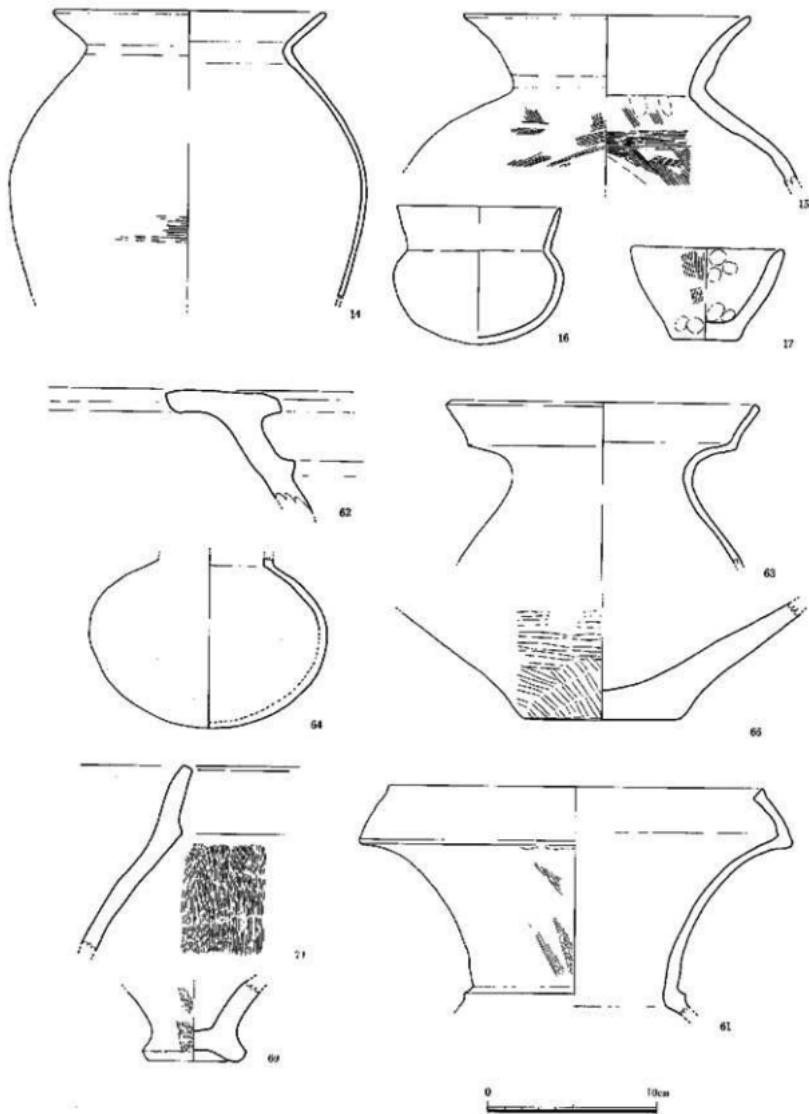


Fig. 11 溝出土土器実測図1 (1:3)

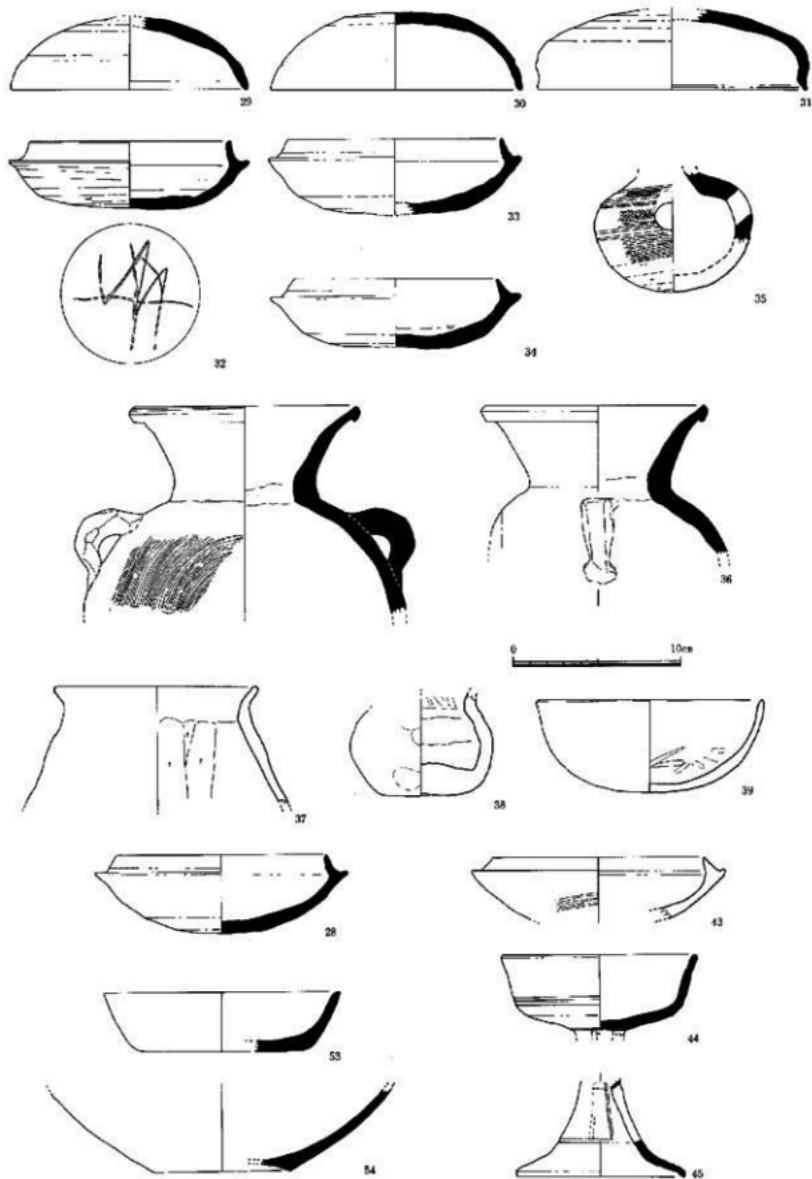


Fig.12 溝出土土器実測図2 (1:3)

この他溝13と相前後する時期の溝には溝12、14、17、30が挙げられる。いずれもほぼ東西方向を向く。溝12は深さ20cmほどで、溝13に切られる。溝14、17は同一の溝である。溝30は溝32と切り合うあたりで北へ折れる。やや幅広で、その点でも溝13と類似する。いずれも古墳時代後期であろう。

F i g. 12の28は溝12出土の須恵器坏である。口縁部は中位で屈曲気味に立ち上がる。底部から1/3ほどにかけて回転ヘラ削りを施す。口径は12.5cmを測る。43～45は住居跡16掘り下げ中に出土した古墳時代の土器で、溝17に伴うものである。43は土師器の坏身である。口縁部は断面三角形を呈する。外面には叩き状の平行条線が認められる。44、45は高坏である。44は坏部。口縁部が開き気味に立ち上がる。底部には回転ヘラ削りを施す。45は脚部である。長方形の透しを持つ。

溝25 (F i g. 10)

溝25は住居26を切る。方向もほかに共通する溝を持たない。深さは20～30cmである。古代に属すると考えられる。

出上上器 (F i g. 12)

53は高台を持たない須恵器坏である。底部は不定方向のナデを施す。体部は緩やかに内湾しながら開く。54は上げ底を呈する須恵器底部である。底部はかなり薄くなる。体部外面には回転ヘラ削りを施す。内側に煤状のものが付着している。

(4) 井戸、土壙ほかの遺構

井戸1 (F i g. 13)

調査区の西端付近で検出した。上端を相当攪乱で破壊されている。住居跡16、18を切る。ほぼ円形で、径3.3m程を測る。深さは2mを測る。9～12層にかけて完形品を含む多くの土器が出土している。壁は大きく抉り込んでおり、安全対策上床面の輪郭を明らかにすることはできなかつた。

出上上器 (F i g. 14、15)

1～4は土師器甕である。1は口縁は強く外反し、胴部は球形に近い。口縁端部に坦面を持つ。胴部外面はハケメ、内面は縱方向の削り、内底部付近には指頭痕がみられる。器壁は厚い。2、3は小型甕である。2は口縁は外反し、端部は丸く收める。外面はハケメ、内面は削りで、外面に丹塗の痕跡がみられる。胴部は半球形を呈する。3は口縁は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。胴部は球形に近い。外面はハケメ、内面は削りで、内底部に指頭痕がみられる。4は長胴を呈する。口縁は強く外反して開く。外面はハケメ、内面は削りで、外面の口縁付け根に指で押えた痕跡がみられる。7は土師器の把手である。内面に煤が付着している。11は須恵器で、高台付の坏である。浅い器形で、高台は底部端からやや内側に付く。10は須恵器鉢である。尖底を呈し、底部下位には回転ヘラ削りをほどこす。回転ナデにより口縁直下がわずかに凹む。9は高坏脚である。柱部は比較的太い円筒状を呈する。端部は回転ナデによりわずかに凹む。8は高坏である。坏部は浅い皿状で、口縁部は短く屈曲する。端部は内傾する坦面をなす。坏底部は丸みを帯びる。柱部は比較的太い。12は細頸甕である。太鼓型の胴部を持ち、細い頸部が直立する。13は土師器の高坏と思われる。高台付の坏に脚部を取り付けたような形状である。外面は回転ナデ、坏部内底はナデを施す。F i g. 15の5は竈である。掛け口はほぼ円形を呈すると考えられる。掛け口より鉄の先端が高くなる。外面には把手を持っていた痕跡がみられる。外面は主にハケメ、内面は削りを多用する。基部は厚く、安定感が強い。

鉗の内側にはほぼ全面焼が付着している。6も窓で、掛け口が鉗先端より高く、ほぼ円形と考えられる。側面には把手があった痕跡がある。掛け口の下位に沈線を一条巡らせる。調査は外面から鉗の裏面にかけてハケメを施し、大部分ナナデ消す。内面は削りで、掛け口付近は内外面ともヨコナナ。

壺鉗11 (Fig. 16)

住居跡8の西側壁に接して検出された。住居跡8の覆土を切って掘り込まれており、掘方は明らかでない。50°ほど埋置角で埋められている。上窓を下窓に被せた状況である。乳幼児用であろう。
出土土器 (Fig. 16)

上下とも上師器である。72は上窓に用いられた把手付窓である。口縁は緩やかに外反する。胸部はほぼ球形で、ほぼ中位に把手が付く。73は下窓に用いられた窓である。口縁部は短く外反する。腹部はやや長胴で、胸部径は口径を大きく上回る。調整は72、73ともほぼ共通し、外面は口縁部まで縱方向のハケメ、口縁部内面は横方向のハケメ、胸部内面は削りを施す。

土壙21 (Fig. 17)

調査区西端で検出した。ほぼ長方形を呈し、南北80cm、東西40cmを測る。深さは検出面から10~

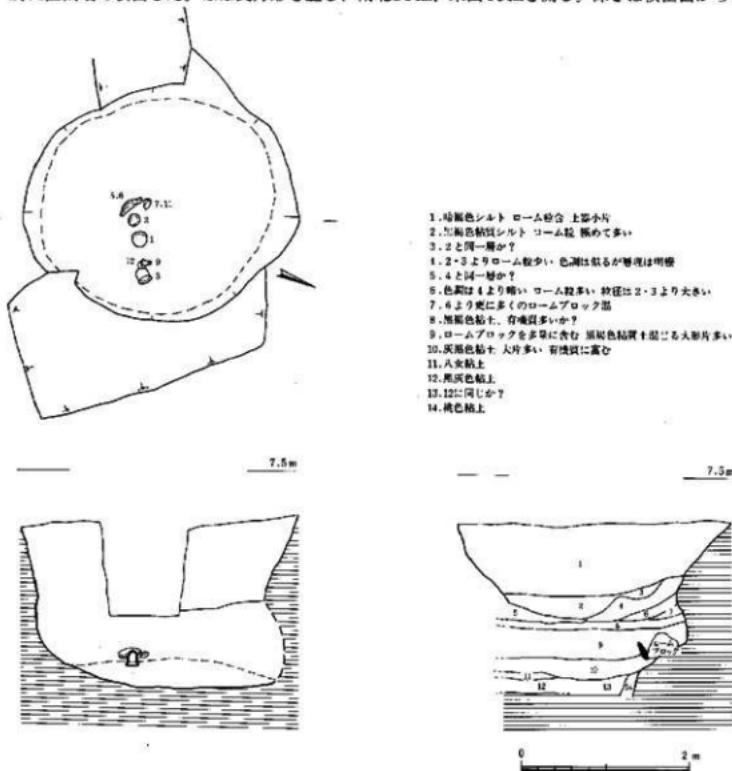


Fig.13 井戸1穴測図 (1:60)

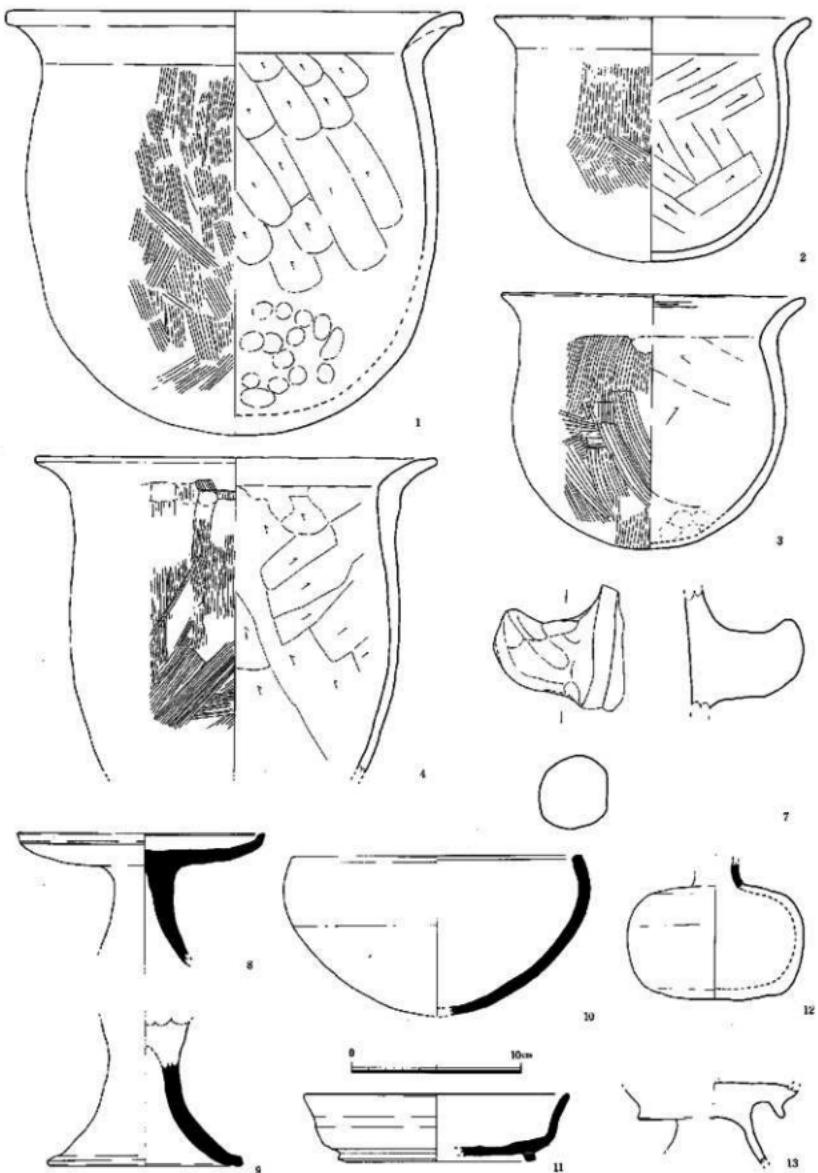


Fig.14 井戸1出上上器実測図1 (1:3)

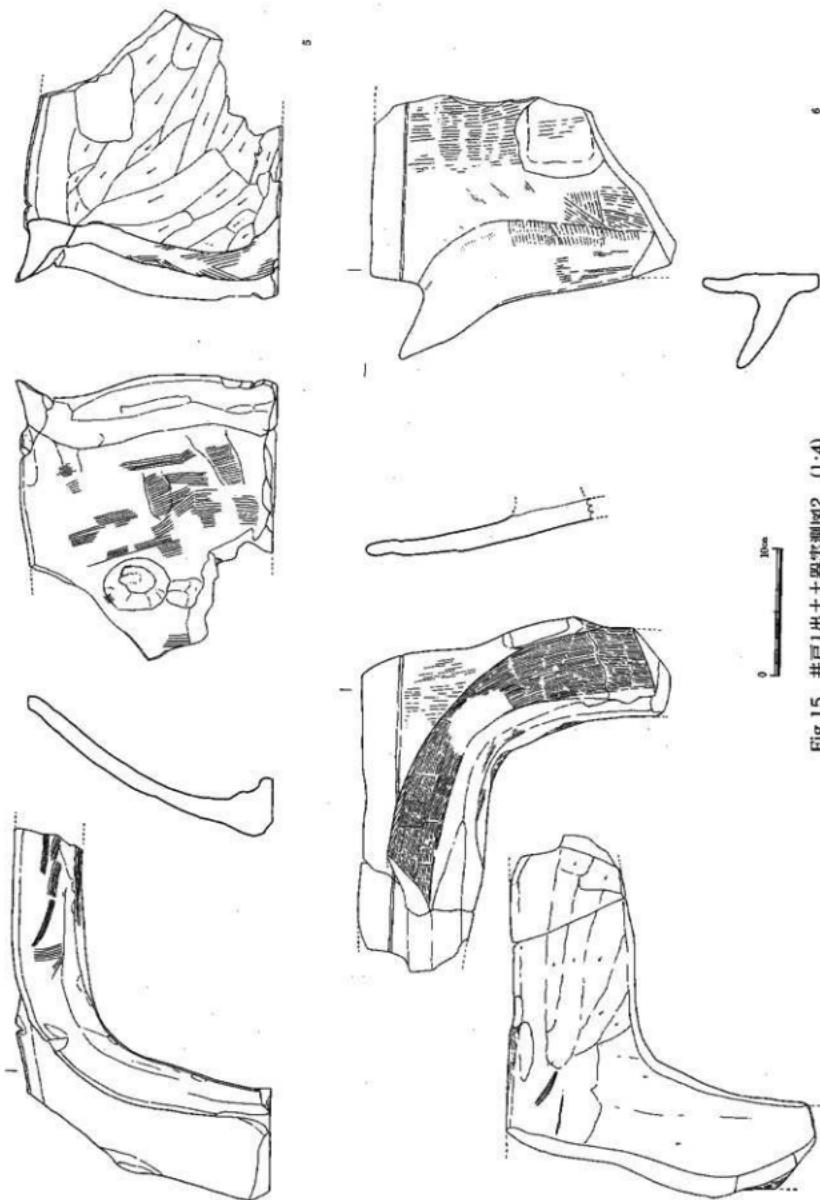
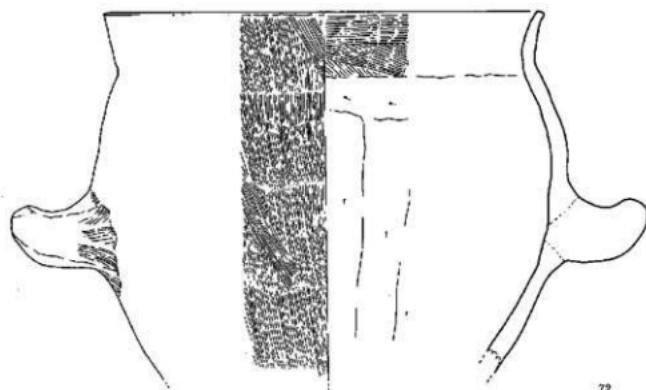


Fig.15 井戸I出土土器実測図2 (1:4)



0 10m

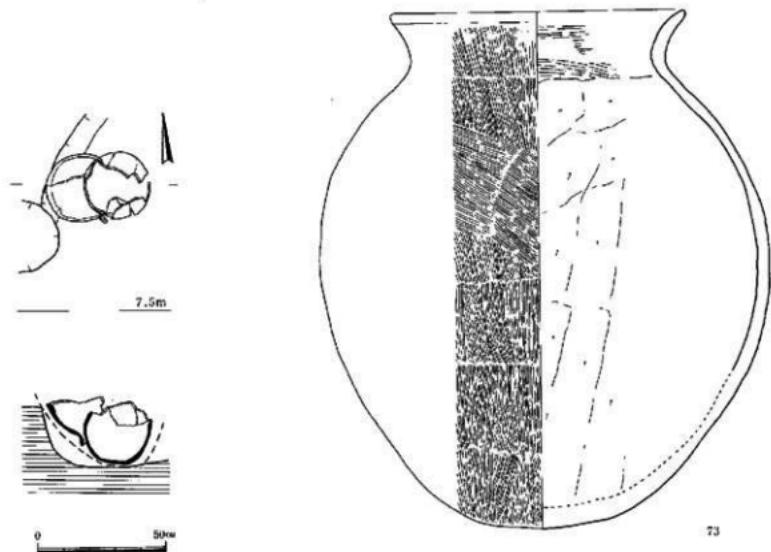


Fig.16 瓦棺墓11実測図 (1:20、1:3)

20cmである。床面はほぼ平坦である。両短壁側には白色粘土を添付し、床面中央にも帯状に白色粘土が見られる。性格は不明である。固化に耐える出土遺物はない。

土壤15 (Fig. 17)

調査区北側中央で検出した。長楕円形を呈する。南北1.3m、東西40cmを測る。床面は段をなし、最も深いところで検出面から30cm程である。

出土土器 (Fig. 18)

40は短頸壺である。頸部は外反しながら大きく開く。口縁端部は垂直に面取りして坦面をなす。頸部付け根に断面三角形の突帯を一条巡らせる。器面の荒れがひどく、調整は不詳。41は壺の底部である。外面に丹塗の痕跡がみられ、丹塗土器であったことが分かる。底部は上げ底状を呈し、体部は緩やかに外反しながら開く。42は器台である。器壁は厚く、脚端部で若干薄くなる。内外面ともナデ調整である。これらの土器は弥生時代中期後半頃に属するものであろう。

土壤22 (Fig. 17)

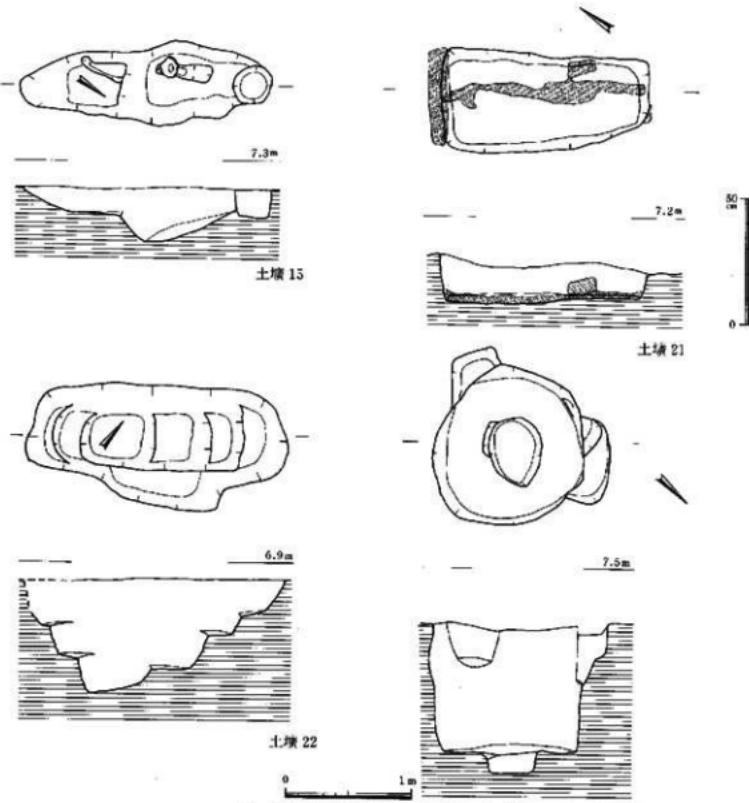


Fig. 17 土壌災済図 (1:20, 1:40) 井戸 34

住居跡20の南側に位置し、住居跡20を切る。長梢円形を呈し、東西1.4m、南北60cmを測る。床面は階段状を呈し、最も深いところで60cmを測る。固化に耐える遺物はない。

この他住居跡20の床面で検出した上塙23も、土塙15、22とほぼ規模、形態が類似するものである。土塙22、23は大形の掘立柱建物になる可能性もあるが、土塙15の周囲には該当するような上塙はない。

土塙34 (Fig. 17)

調査区北東端で検出した。ほぼ円形で、径1.2mを測る。ほぼ円筒形を呈する。深さは検出面から1m程で、床面中央に径50cm、深さ15cmほどの凹みがある。当初井戸かとも考えたが、八女粘土まで達しておらず、湧水もない。

出土土器 (Fig. 18)

66は広口壺の口縁である。口縁は平坦な鋤先口縁で、端部は坦面をなす。68は66と似た口縁部であるが、体部の張りがわずかに異なり、高杯になるものと考えられる。口縁は平坦で、内側に突出する鋤先状を呈する。端部は坦面をなす。外面に丹塗の痕跡が認められる。67は蓋底部である。底部は厚く、わずかに平底状になる。外面にハケメを施す。

(5) 各遺構出土石、金属、上製品 (Fig. 19)

1001は検出面出土の石包丁である。杏仁形を呈し、幅3.5cmを測る。二孔を穿孔し、孔間は2.5cmである。暗い小豆色を呈し、立岩産の輝緑凝灰岩製と考えられる。1002は住居跡16出土の石包丁未製品である。平面は直角三角形に近い。図上辺は研磨による刃部をなすが、下辺も剥離によって薄くしている。両面から敲打によって穿孔をしかけている。この形態から通常の石包丁が作り得るとは思われず、失敗の後放棄されたものではないかと考えられる。住居跡16からは黒耀石の石核、剥片も出土しており、石器製作を行なっていた可能性もある。1003は花崗岩製の石鍤である。長4.0cm、幅2.1cmを測る。中央に両面にわたって溝が刻まれている。1004は住居跡26出土の滑石製円板である。径2.3cmを測る。中心部がわずかに凹む。1005は住居跡16上層出土の滑石製小玉であるが、溝17に伴うものかもしれない。

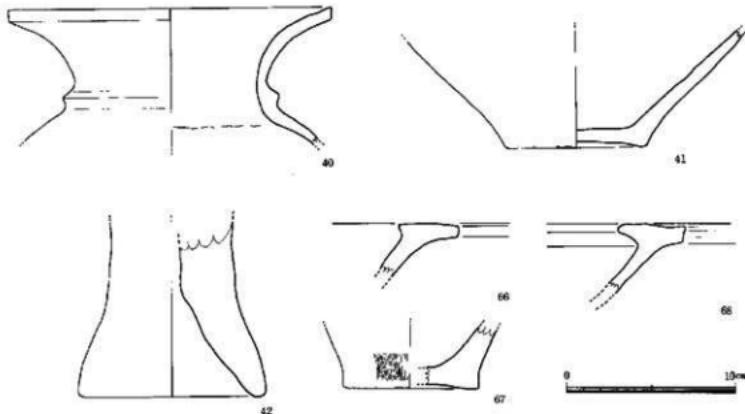


Fig. 18 土塙出土上器実測図 (1:3)

2001は住居跡8出土の紡錘車である。土器片の再利用で、周囲を比較的丁寧に擦り欠いている。計3.5cmを測る。2002は遺構42出土の投弾である。紡錘形を呈し、長4.2cmを測る。2003は住居跡4、5、6検出面で出土した土玉である。円柱形を呈し、長2.3cmを測る。2004は井戸1出土の土鍤である。

3001は耳環である。検出面出土であるが、遺構35に伴うものか。径2.1cmを測る。芯は銅製で、破面に金もしくは銀張りの痕跡が認められる。

2. 小結

比恵遺跡62次調査では、調査面積に比して濃密に遺構が分布し、大きな成果を挙げたと言えよう。今回調査で検出した多くの遺構は、大きく四時期に分かれると考えられる。(Fig. 20)

第1期は弥生時代中期である。円形住居、上壇を中心とし、調査区の西側に集中する傾向が見られる。第1期に属する遺構は、住居跡8、16、20、土壙15、34などがあり、土壙15と共に通した形態を呈する土壙22、23も1期と考えられる。住居跡16、20の位置関係から推測したとおり、少なくとも二つの小期に細分される。但し、遺構に伴わないものも含め出土した遺物を見ると、中期初頭から末まで出土している。遺構は西側に集中するが、上壇34は東側に位置する。土壙34の周辺に位置する不定形土壙43や44等も、出土遺物から見ると該期の可能性が高く、類似した性格の遺構がある程度集まる傾向を見てもよいかもしれない。調査区周辺では北側200mの50次、57次調査地点で多く検出されている。また北側に接する55次地点でも円形住居跡が検出されている。南側の45次調査地点でも削平された住居の存在が推定されており、50次、57次地点を中心とする集落の南西端付近にあたるものであろう。また土壙15、22、23に類似した土壙は、西側に位置する11次調査地点で検出されている。この地点では掘立柱建物が3棟検出されているが、上壇はいずれも掘立柱建物を構成する柱穴ではない。

第2期は弥生時代後半頃～古墳時代初頭にかけてである。主な遺構は住居跡と溝である。溝は弥生時代後半から終末にかけて溝9、10、37、32、38等が相次いで掘られる。これらの溝は比

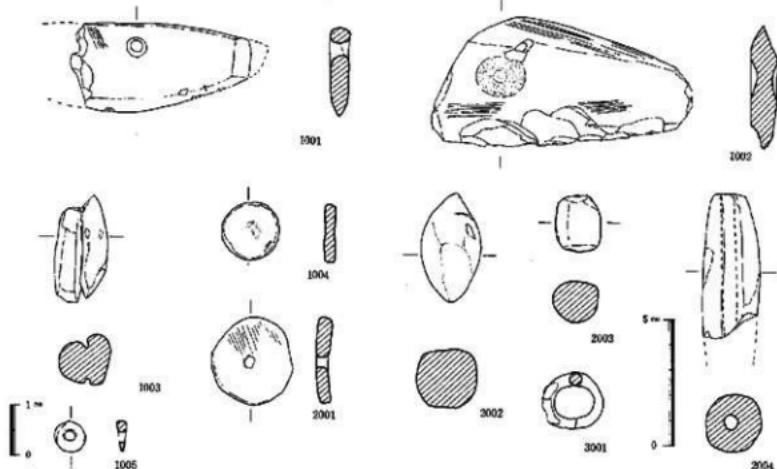


Fig.19 石、金属、土製品実測図 (1:2, 1:1)

較的浅く、幅も狭い。これらの溝を切って弥生時代終末ないしは古墳時代初頭頃、整然と並行する溝2、溝33が掘られる。先行する溝と比べて、深くまた幅広である。生活遺構はこの二条の溝の西側にある。すなわち遺跡の縁辺に近い側に集中しており、その点が解釈に苦しむところではある。住居跡4、5、6、18等は、ほぼこの並行する溝と同時期と考えられる。周辺の調査区を見ると、該期の遺構が多い。55次地点では弥生時代後期前半から中頃の井戸が検出されている。また11次調査区でも古墳時代初頭の井戸があり、西側に広く生活域が広がっていたことが知られる。また溝であるが、45次調査区の溝S D O 5は、方向としては溝33につながる位置にあり、溝33は陸橋を介して南へ伸びるかも知れない。北側では55次調査区の溝11、13が、対応する可能性があるが、幅、深さ、出土遺物とともに今回調査区には及ばず、疑問がある。さらに北側には36次調査区があり、ここでは該期の方形周溝墓が検出されている。仮に溝が延長していたとしても、やはり溝の西側にあたる位置である。さらに北側50次調査区でも幅6mで並行する該期の溝2条が検出されている。ここに至ると、62次調査区からは150m、55次調査区からでも100m離れており、安易に繋ぐには躊躇される。むしろ、溝33の南端部や、55次調査地点のように、断続を繰り返しつつ伸びて行く可能性を考えた方がよいかかもしれない。

第3期は古墳時代後期である。主な遺構は住居跡と溝、墓である。住居跡は前代と異なり、東側に集中する傾向がある。住居同士に切り合いが見られ、かなり密に分布していたようである。妻棺墓11は小型棺であり、乳幼児を住居の近くに葬ったものと考えられる。溝は住居との間に切り合いが見られるものが多く、溝が住居に先行して掘られた可能性が高い。溝はほぼ東西方向をなすものが多く、また90°に折れて南北になるものもある。周辺の状況を見ると、まず溝では55次調査区の溝17、19がある。これも同じく東西方向である。また住居跡は、45次調査区でまとめており、ここでは井戸も検出されている。井戸は55次調査区でも検出されている。該期の集落は、「那津官家」との関係が気になるところである。

第4期は古代である。遺構は井戸と溝である。井戸1は多量の遺物が出土したが、周囲に他の生活遺構が見当らない。また溝25は前代の溝とは方向を異にする。周辺調査区の該期の遺構を見ると、63次調査区で検出された道路状遺構が注目される。

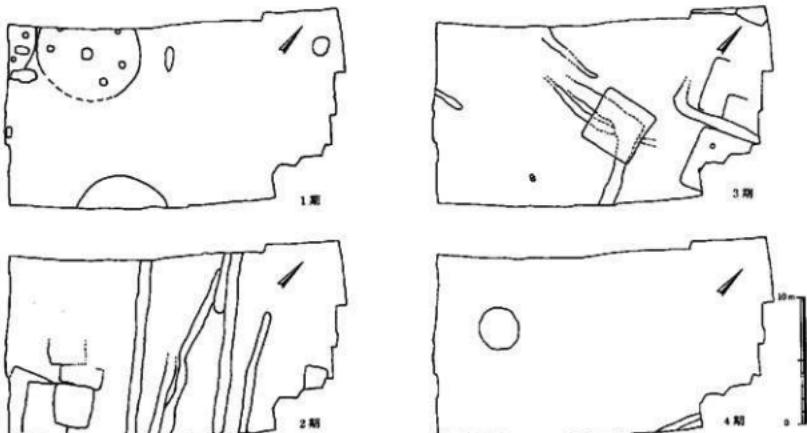
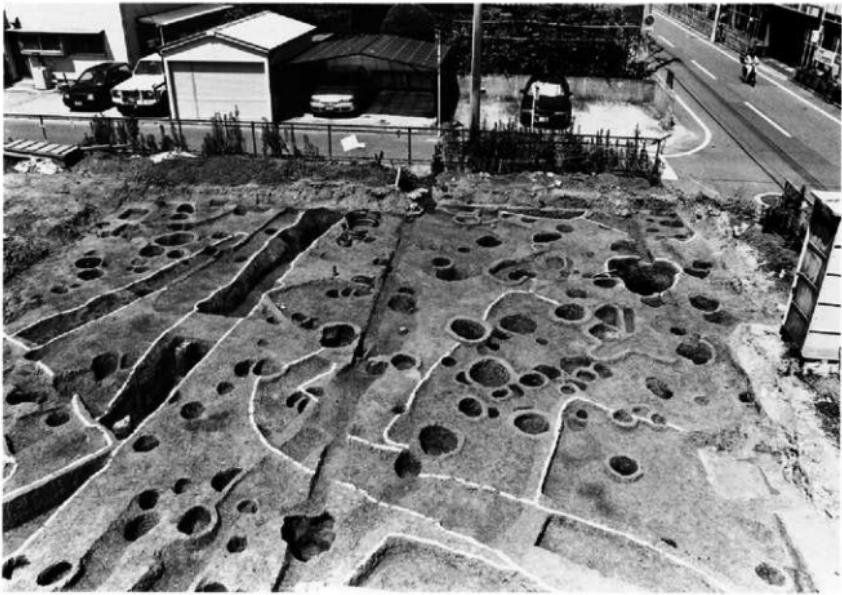


Fig.20 時期別遺構分布図 (1:400)



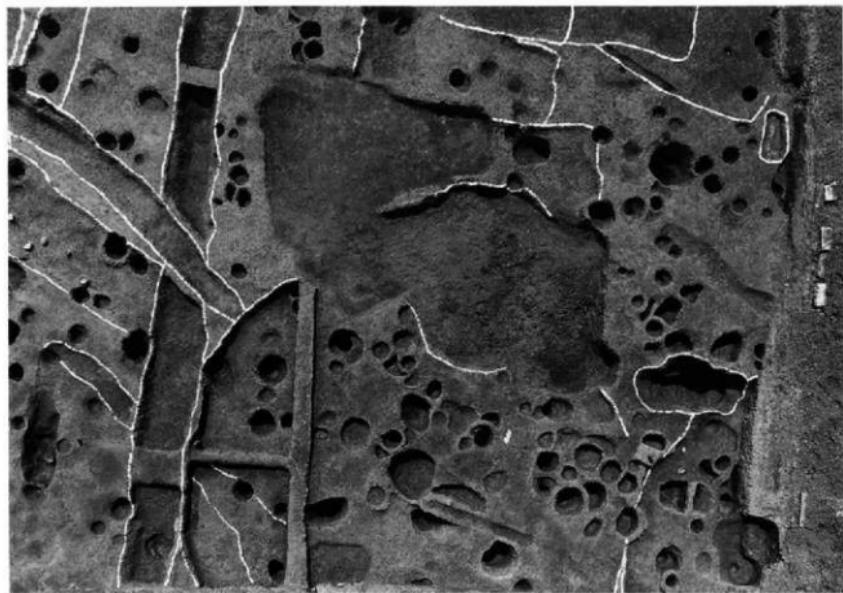
(1) 調査区西半区全景



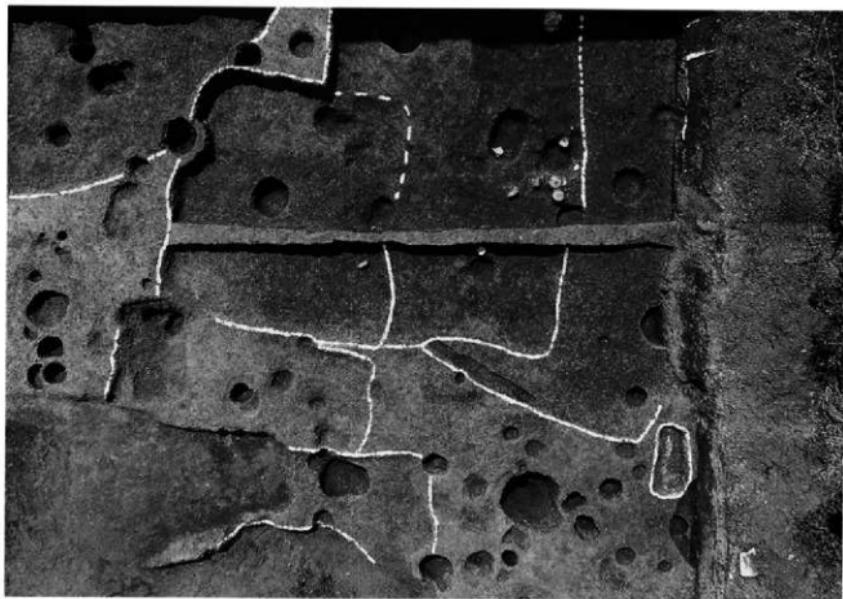
(2) 調査区東半区全景(南から)



(1)住居跡8(北から)



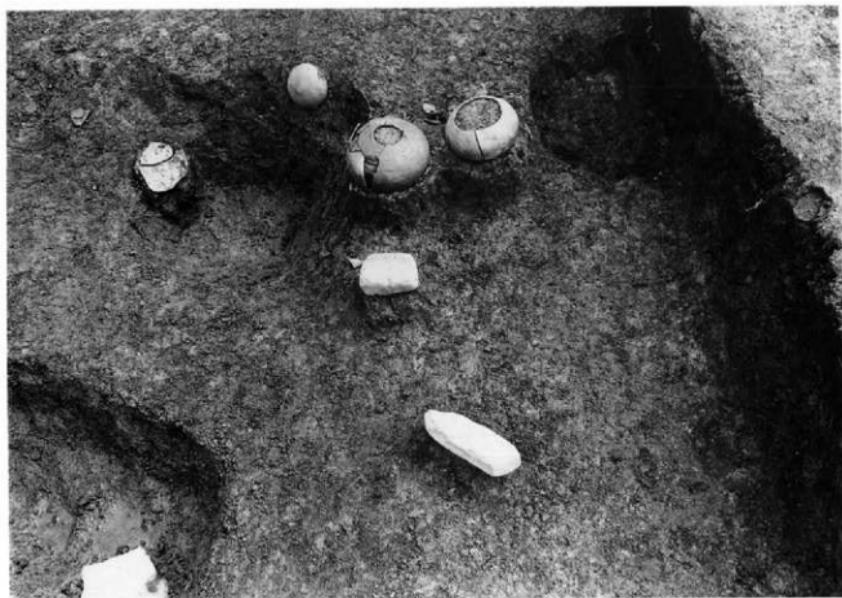
(2)住居跡16、20



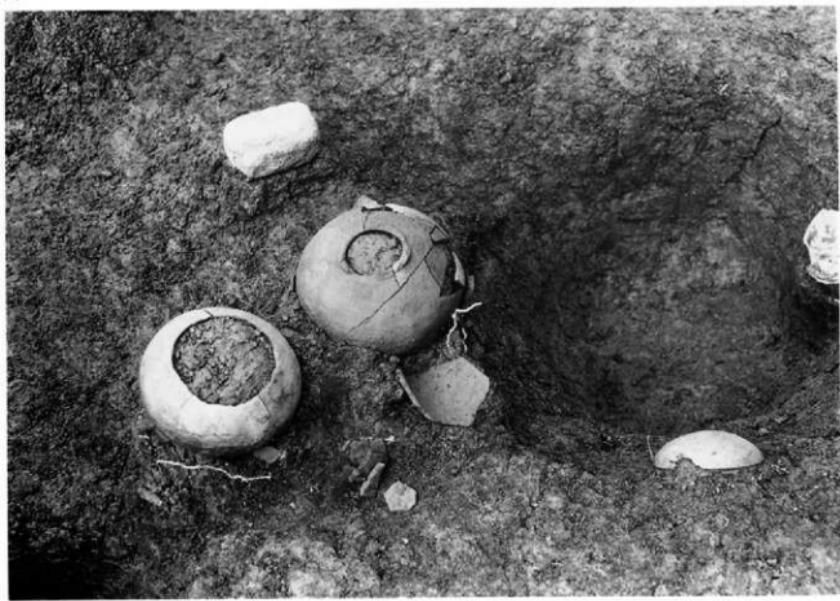
(1)住居跡4、5、6(北から)



(2)住居跡5、6土層(北から)



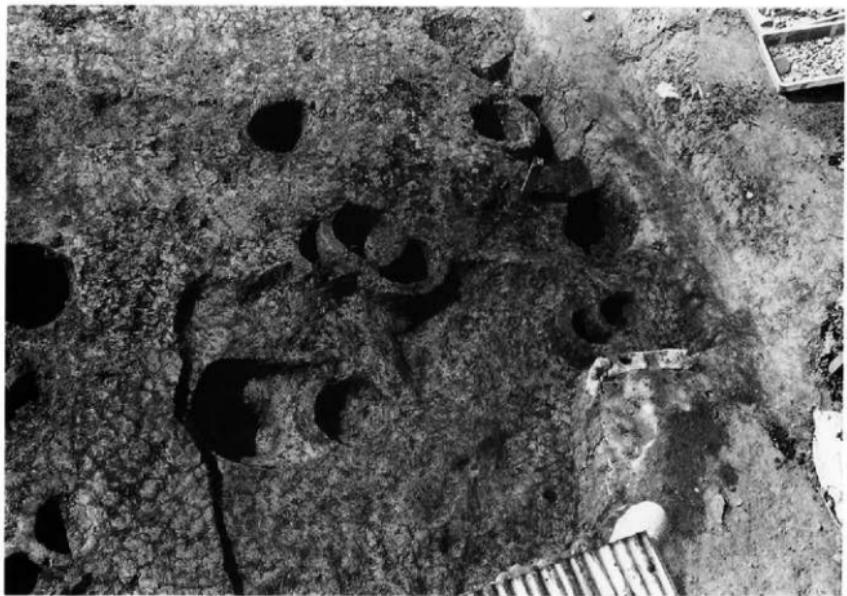
(1)住居跡4遺物出土状況(東から)



(2)住居跡4遺物出土状況(西から)



(1)住居跡24(西から)



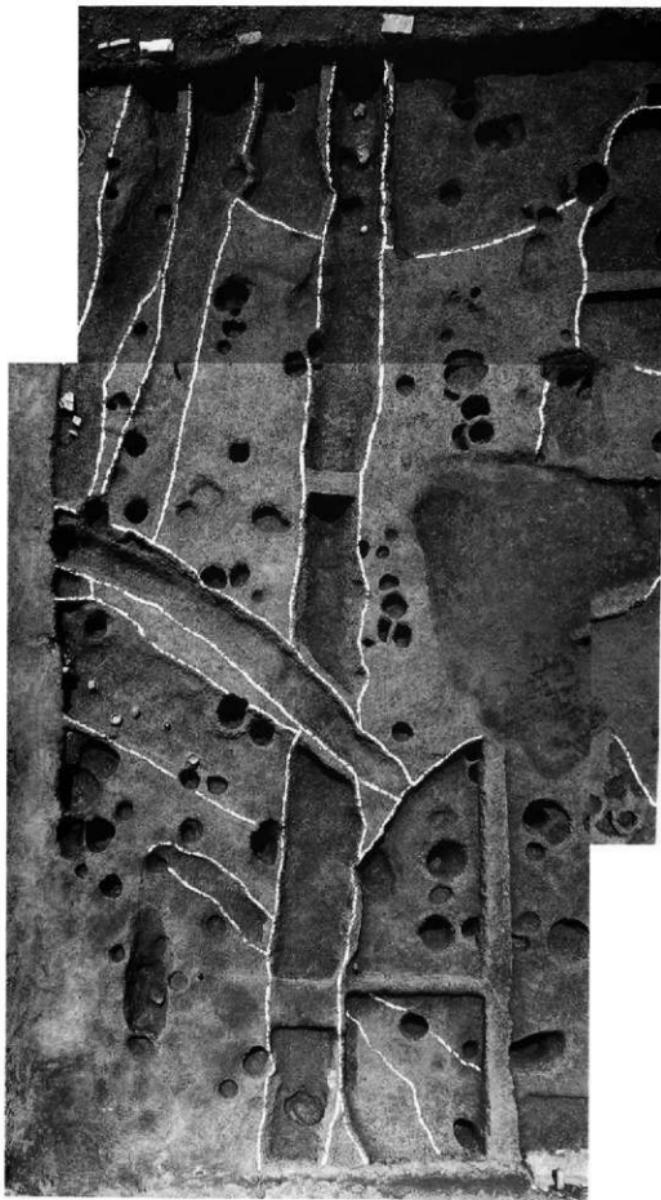
(2)遺構42(南から)



(1)溝30、遺構31、35(南から)



(2)耳環出土状況(東から)



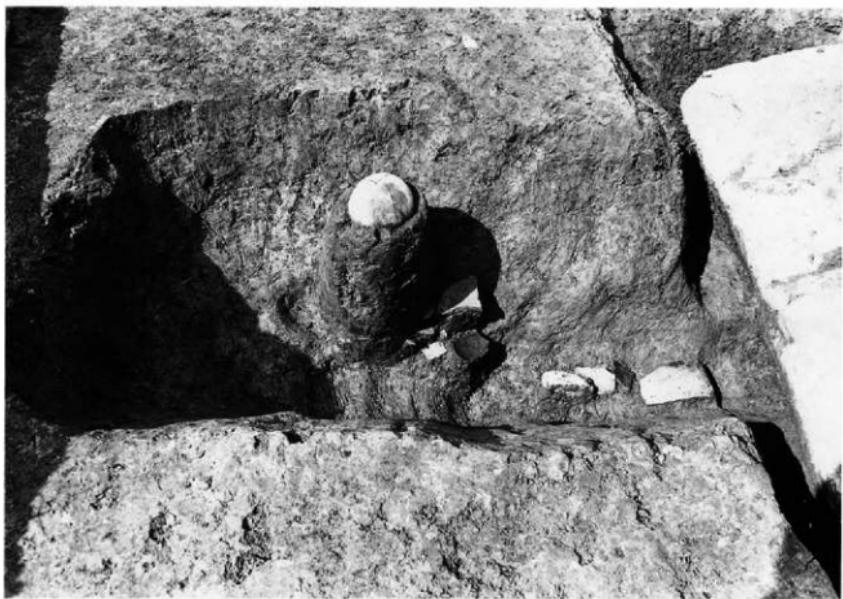
满2,9,10,12,13,14,17



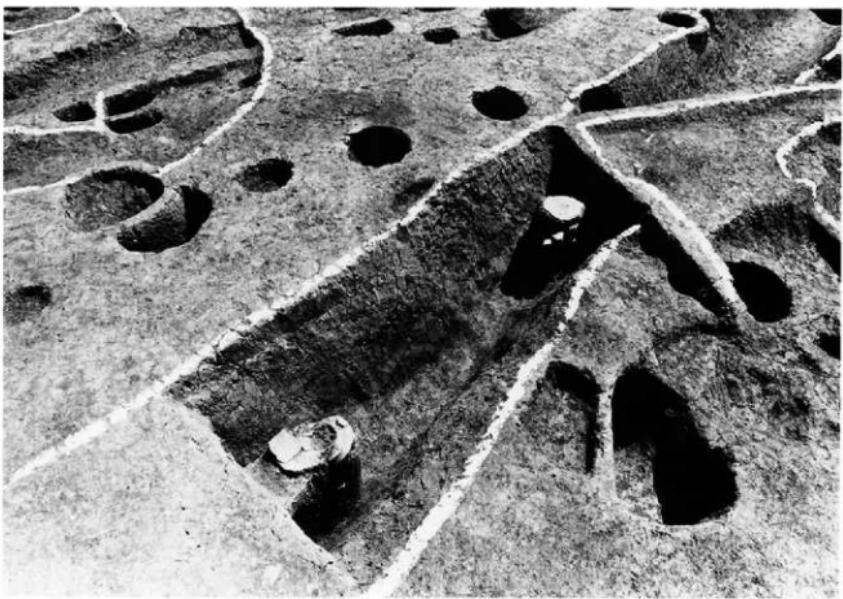
(1)溝2遺物出土状況(北から)

(2)溝32, 33, 13(東から)





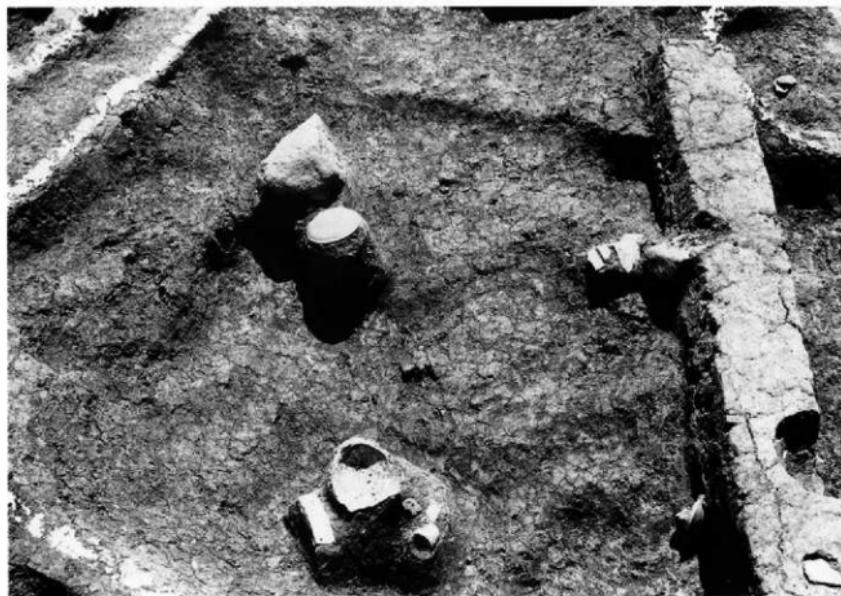
(1)溝33遺物出土状況(東から)



(2)溝33遺物出土状況(西から)



(1)溝13遺物出土状況(南から)



(2)溝13屈曲部遺物出土状況(南から)



(1)溝13遺物出土状況(西から)



(2)窓棺墓11(北から)



(1)井戸1(北から)



(2)井戸1土層(西から)



(1)井戸1遺物出土状況(西から)



(2)土壤15(東から)



(1)土壤27(東から)



(2)土壤34(西から)

比恵遺跡群第63次発掘調査報告

遺跡略号 HIE-63
遺跡調査番号 9739

例　　言

1. 本章は共同住宅建設に先だって、福岡市教育委員会が1997年9月4日～10月4日にかけて行った比恵遺跡第63次調査の報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡1、溝2のように記述する。
3. 本章で使用する方位は磁北である。
4. 本章で使用した遺構実測図は宮井芳朗、中暢子が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
5. 本章で使用した遺物の実測図は宮井の他中暢子が作成した。また製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
6. 本章使用の写真は宮井が撮影したものである。
7. 遺物実測図の番号は収蔵時の登録番号に一致する。
8. 本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9. 本章の執筆、編集は宮井が行なった。

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1997年7月8日付けで、坂井清敏氏より、共同住宅の建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが提出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である比恵遺跡内に位置しており、遺構の存在が予想されることから、埋蔵文化財課では審査願いを受けて97年7月22日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構が良好な状態で検出された。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される敷地全域を対象として発掘調査を行ない、記録保存を図ることになった。発掘調査は、坂井氏との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなった。調査は1997年9月4日に着手し、10月4日に終了した。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝（調査年度） 柳田純孝（整理年度）

第2係長 山口譲治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 浅原千晶（調査年度） 河野淳美（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 野村道夫 楠林司朗 森田祐子 古賀典子 持丸玲子 平田浩美 須川ゆかり 石川洋子
鍋山治子 坂本俊子 穴井加菜子 馬目真吏

整理作業 中暢子 大石加代子 林由紀子

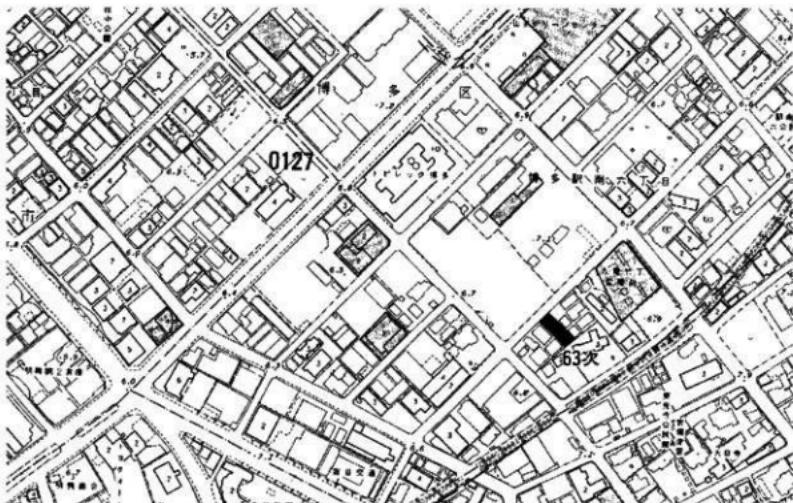


Fig.1 比恵遺跡63次調査地点 (1/4,000)

また調査時の条件整備等に関して坂井氏や工事担当の山田工務店に多くのご配慮を賜った。また調査中には多くの方々のご教示を得た。記して感謝申し上げるとともに、本報告に十分生かせていないことをお詫びする次第である。

遺跡調査番号	9739	遺跡略号	HIE-63
調査地地番	福岡市博多区博多駅南6丁目17-5		
開発面積	303m ²	調査対象面積	230m ²
調査期間	1997年9月4日～10月4日	分布地図番号	37-0127

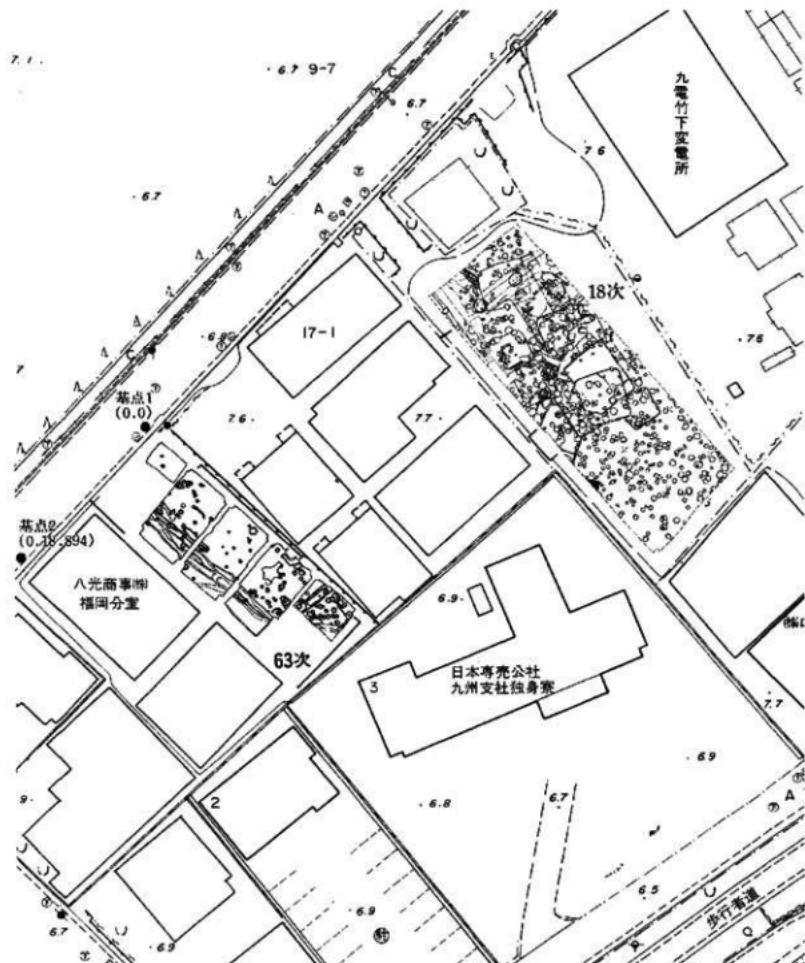


Fig.2 調査区位置図 (1:500)

II. 調査の記録

1. 調査の記録

(1) 検出遺構

今回調査では重機の進入の関係上、対象地の長軸に平行に東西に2分して、反転しつつ調査を行なった。調査地内には建物の基礎が遺存しており、その基礎によって分けられる範囲を北から1～5区と仮称して区割りとしたが、測量の基点としては、調査区に最も近く、地割りに平行する人孔2点を用いた。また今回調査では弥生時代の井戸1基、住居跡の可能性がある遺構2基、古墳時代初頭の井戸1基、古代の道路及びその側溝と見られる硬化面1条と溝2条、その他時期不明の溝、ピットなどを検出した。以下、主なものについて説明を加える。

道路状遺構（硬化面遺構2、溝1、溝3 Fig. 3, 4, 5）

調査区の西端で検出した。硬化面をなす遺構2と、側溝と考えられる溝1、溝3からなる道路状遺構と考えられる。南側は近世以降の搅乱である溝6で切られ、西側は調査区外に出る。調査時で知られる延長は溝3部分で16m、幅は遺構2部分で1.2～1.5m、溝1東端まで1.6～2.2m、溝3東端まで3mほどを測る。

硬化面遺構2は、厚さ5cmほどにわたって小砾、上器細片を敷き詰めて踏み固めたような状況を呈している。土器片はほぼ完全に破碎され、器形のわかるものは極めて僅少である。人为的に粒を揃えてバラスを作った可能性が高い。

溝1、3は側溝と考えられる遺構である。溝1が溝3を切っており、道幅を狭めたか、西側へ移動したものと考えられる。なお溝1と溝3の間には硬化面ではなく、側溝が付け変えられた際に舗装もやり直された可能性があるが、全面的なものではないよう、溝1は硬化面2の舗装を切って掘り込まれている。

住居跡状遺構（Fig. 3）

住居跡の可能性があるものとして、遺構8、遺構9が挙げられる。いずれも南端の5区で検出した。遺構8は5区の北端に南辺4m、深さ10～15cm程の落ち込みとして検出されたものである。遺存が悪いため4区では検出できていないが、あるいは遺構7などがその延長にあたるのかも知れない。方形もしくは長方形に復元できるプラン以外に住居跡とする根拠に乏しい。床面にL字形をなす溝があり、端部は壁を抉るピットに連結する。

遺構9は5区の東端で検出した。西辺3m、北辺0.5m程が検出され、深さは15cm程である。比較的大きなピット10、153などが床面に見られ、いずれかが壁際土壘になる可能性もある。遺構8、9とも遺存が悪く、また部分的な検出であるため、住居跡である確証はない。

井戸（Fig. 4, 6）

井戸1は2基検出した。井戸13および井戸14である。井戸13は古墳時代初頭の井戸である。円形もしくは梢円形を呈すると思われる。検出面での径は1.25mを測る。深さは1m程である。床面は段状を呈する。覆土は各層にロームブロック、ローム粒を多量に含み、人为的な埋め戻しと考えられる。上器はとくに4、5層に集中するが、床面近くからも出土する。井戸としては深さにかけるが、中心

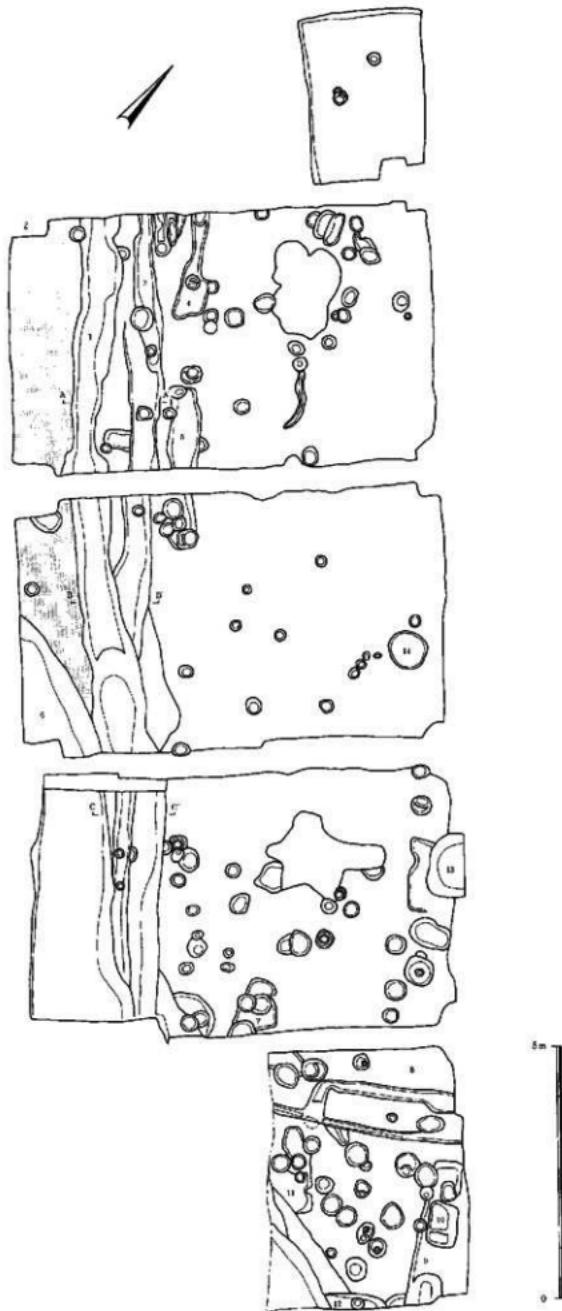


Fig.3 調査区造構配置図 (1:100)

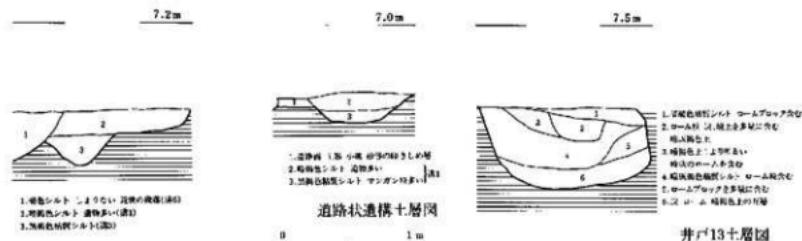
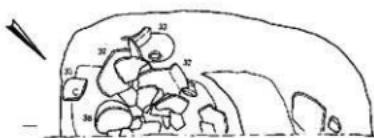
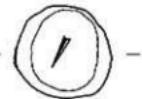
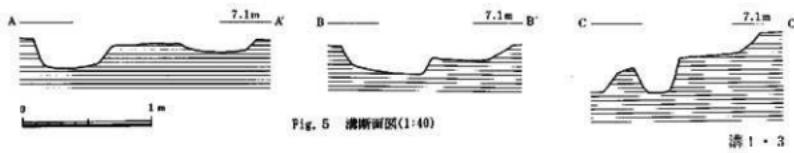


Fig. 4 各種構土層図(1:40)



部は調査区外にあると思われる。

井戸14は弥生時代の井戸である。円形を呈し、検出面での径0.75mを測る。断面は円筒形を呈し、深さ2.4mを測る。床面は八女粘土下の砂質シルト層まで達している。厳密な分層はしないが、上層は黒色土で比較的小さな破片が多く、下層は灰黑色土で粘質が強く、大破片が集中する。

(2)出土遺物

道路状遺構出土土器 (Fig. 7)

5～8は遺構2（路面）出土の土器である。いずれも須恵器である。5は高台付の壺底部。高台は低く、底部付け根からやや内側に付くようである。6はかえりを持つ壺口縁部。受け部は水平に張り出す。口縁部は短く内傾する。7は直行する壺口縁部である。高台を持つものであろう。8は壺口縁部。断面方形に仕上げ、端部は回転ナデにより沈線がみられる。

1～3は溝1出土土器である。いずれも須恵器である。1は皿である。口縁は開き、底部との境は明瞭でない。底部には回転ヘラ削りを施す。2は高台付の壺底部である。高台は華奢で、底部端よりやや内側に着く。外面は底部まで回転ナデを欠ける。4は壺口縁部である。幅広の階帯の中央を押さえて凹面をなしたような口縁部である。上端部は坦面をなす。内外両回転ナデ。

9は溝3出土の須恵器である。壺口縁部片で、蓋とも身ともとれる器形である。口縁端部は受け部よりわずかに高い。

これらの出土土器はいずれも細片で、そのまま遺構の時期を示すかどうか不安な点もあるが、道路の時期が奈良時代まで下ることは認めてよいであろう。

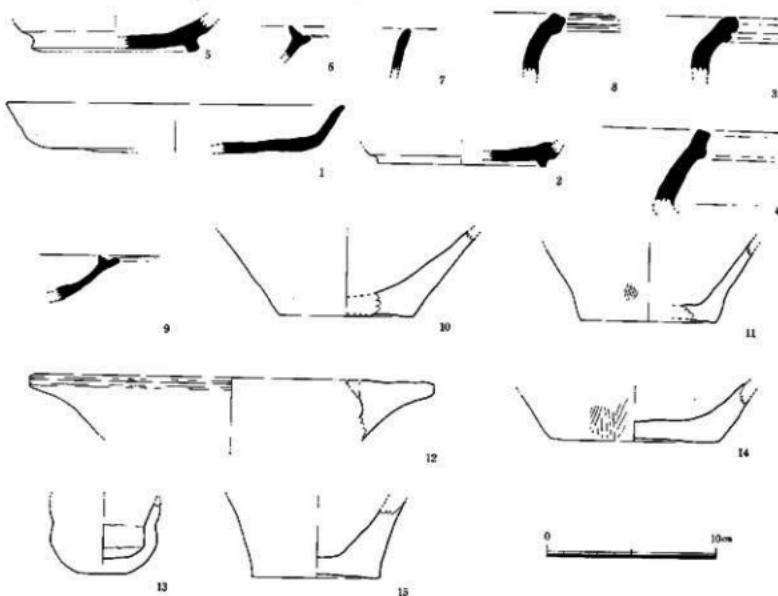


Fig. 7 各遺構出土土器実測図 (1:3)

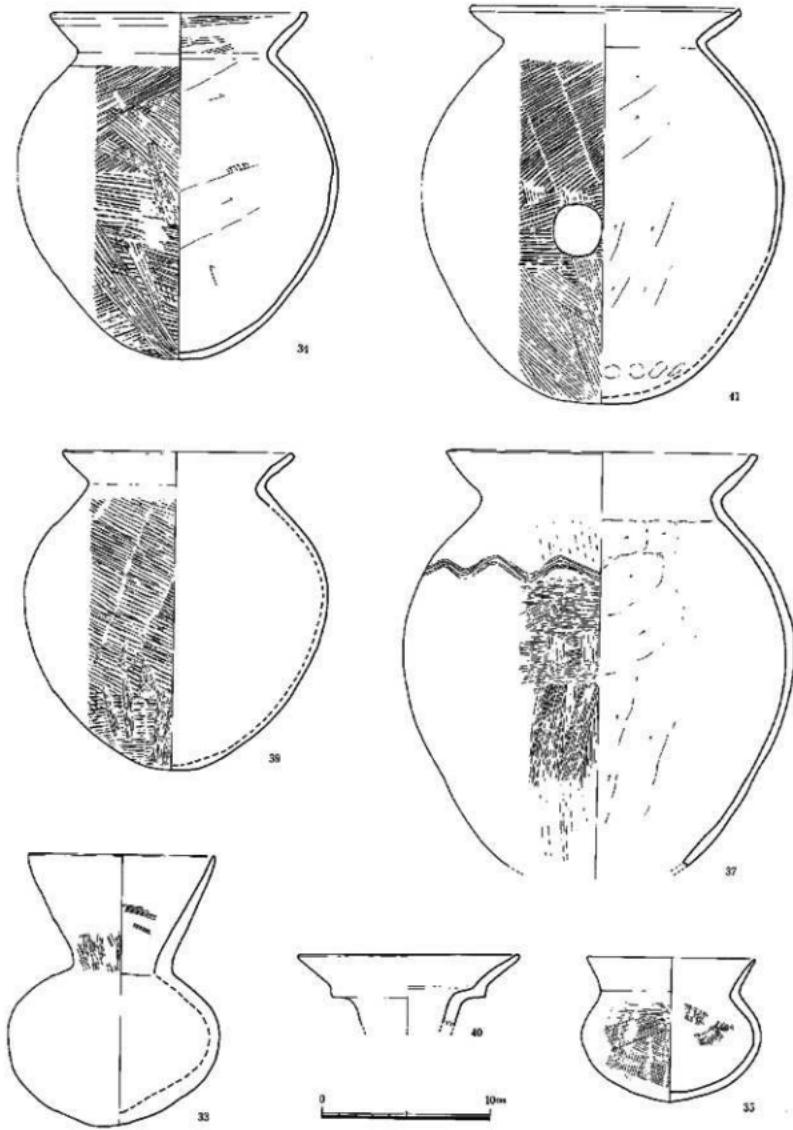


Fig.8 井戸13出土土器実測図1 (1:3)

住居跡状遺構、ピット出土土器 (Fig. 7)

10、11は遺構8出土土器。いずれも弥生土器の底部である。10は壺である。わずかに上底気味になり、体部は大きく開く。器面がかなり荒れているが、内外ともナデと考えられる。11は甌である。外面にハケメが認められる。

12～14は遺構9出土である。12は広口甌である。口縁部は鋸先状を呈するが、内縁部は故意に打ち欠かされたものと考えられる。内外に丹塗を施す。14は甌底部。底部端から体部が直線的に開く。外面には粗いハケメが見られる。13は小形甌である。口縁部は内湾する。底部は平底で、比較的明瞭である。外面ナデ調整である。

15はピット142出土の弥生土器である。甌底部で、外面はハケメらしい痕跡が認められる。ナデ消したものかもしれない。

井戸13出土土器 (Fig. 8)

34、37、39、41は甌である。34は下半がややすぼまる球形胴で、11縁部は直線的に伸びる。端部は水平で、内側につまみ出す。外面は上半部に右上がり方向、下半部に水平方向の叩きを施した後、肩部付近まで粗くハケメを施す。内面はケズリ。39は外面をほとんど叩き調整し、底部付近のみ粗にハケメを施す。叩きの方向も底部付近のみ水平方向で、大半は右下がりの叩きである。口縁部はほぼ直線的に伸び、端部は外傾し、わずかに内側につまみ出す。内面は削りであるが、痕跡が不明瞭で、ナデが施されているかもしれない。41は球形胴の甌である。11縁部は直線的に伸び、端部は外傾する。

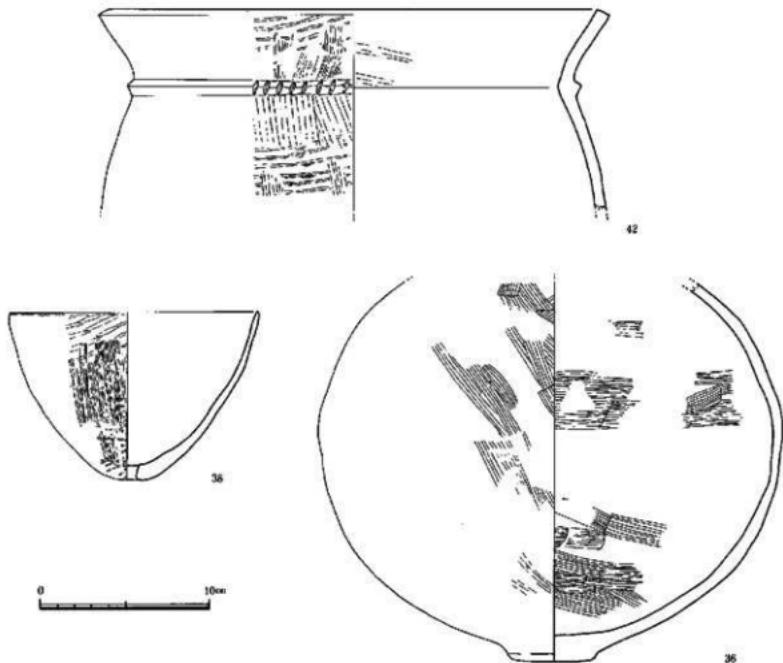


Fig.9 井戸13出土土器実測図2 (1:3)

外面は上半部は右上がり、下半部は水平方向の叩きを施し、底部から胴部中位にかけてハケメを施す。内面は削りを施し、内底部には指頭痕が見られる。胴部の2か所に、焼成後の穿孔が見られる。以上3点はいずれも口縁部が強く屈曲し、外面に稜が立つ。37はやや偏球形の胴部を持つ。口縁部は緩やかに開き、内湾しながら伸びる。端部はほぼ水平である。肩部に櫛状工具で波状文を巡らす。外面はハケメを施し、胴部中程は横方向、下半は縱方向、波状文より上は、それ以下とは異なるやや粗い縱方向のハケメを施す。33は長頸壺である。偏球形の胴部を持ち、頸部は大きく直線的に開く。端部は薄く仕上がる。外面は全体に丁寧なナデを施すが、頸部の一部にハケメが認められる。35は小形の短頸壺である。口縁部は短く開き、端部は薄く仕上がる。内外ともハケメを施す。

36は大形の壺である。II縁部を欠く。ほぼ球形の胴部で、底部は突出する。内外面にハケメを施す。38は小形の鉢である。単口縁で、丸みを帯びつつ広がる。底盤は小さな丸底で、中央に穿孔する。外面は叩きの後ハケメを施す。42は甌である。II縁部は直線的に開き、端部は坦面をなす。付け根に突堤を一状巡らせ、刻目を施す。外面はII縁端部近くまで叩きを施し、部分的にハケメで消す。内面は口縁部はハケメをナデ消している。

井戸14出土土器 (Fig. 10, 11, 12)

Fig. 10は壺を掲げた。25は大形壺である。口縁は鋸先状を呈し内傾する。胴部は強く張り、口径を超える。口縁部下に断面三角形の突帯を一条巡らせる。内外面ナデ。26は大形甌の胴部である。比較的シャープな断面方形の突帯が二条巡る。内外面ナデ。25、26は胎土、色調が類似し、同一個体の可能性があるが、法量的に疑問もある。いずれにせよ井戸作として用いられた可能性が高い。17、22、23、24は甌である。23が鋸先状のII縁であるほかは、いずれも「く」字II縁である。調査は外面がハケメ、内面はナデを施す。17はII縁が強く屈曲し、内溝する。端部は坦面をなす。胴部は張りが強い。22は胴部があまり張らない。口縁部は短く開き、端部は丸く納める。内面にもハケメを施す。23は外傾する鋸先II縁を持つ。24は胴が張り、II縁部は外反しつつ開く。

Fig. 11は甌である。16、20、30は直口甌である。肩が張り、頸部は直立しつわざかに外反する。端部は坦面をなす。内外面ナデを施すが、工具痕が顯著に残る。20も同様の型であるが、頸部と胴部の境が判然としない。口縁端部は坦面をなす。口縁下に穿孔を施す。外面は日の粗いハケメを施す。頸部内面は指頭痕、胴部内面はナデであるが、工具痕が残る。30は口縁部が外反する。内外とも日の粗いハケメで、II縁部外面はヨコナデで消す。底部はやや上底気味になる。31は口縁部が袋状を呈する。頸部と胴部の境は不明瞭である。底盤は突出気味になる。内底部に工具痕が残る。28は袋状II縁甌であろう。紡錘形の胴部を持ち、頸部は細い。外面は丹塗磨研と思われ、頸部は縦、上半部は横、下半部は縦方向と思われる。内面は全体に指頭痕が顯著に残る。32は袋状口縁甌である。II縁部は受け口状になる。頸部はゆるくすぼまり、胴部との境は不明瞭である。外面は丹塗で、やや幅広の工具で、丁寧なナデが施される。

Fig. 12の21も甌である。肩が張り、甘い稜をなして頸部が立ち上がる。丹塗はなく、内外丁寧なナデを施す。27は高坏である。わずかに外傾する鋸先口縁を持ち、口縁部下に断面三角形の突帯を一条巡らせる。内外面丹塗磨研を施す。口縁上端には暗文を施す。暗文は30本程度を一単位としている。口縁下端部には指頭痕が見られる。18、19、29は器台である。18、19は同一個体と考えられる。器壁は厚い、棒状工具以胎土を巻きつけて成型したと思われる。29も器台である。18、19より小形で、作りも丁寧である。

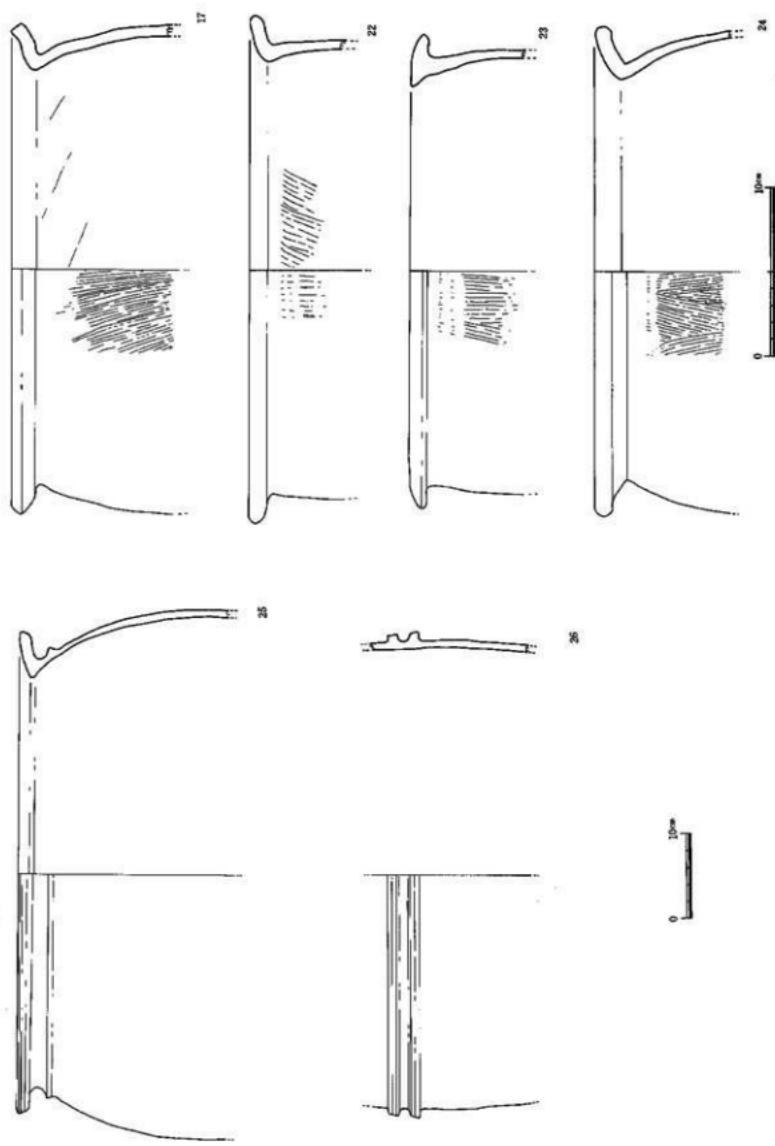
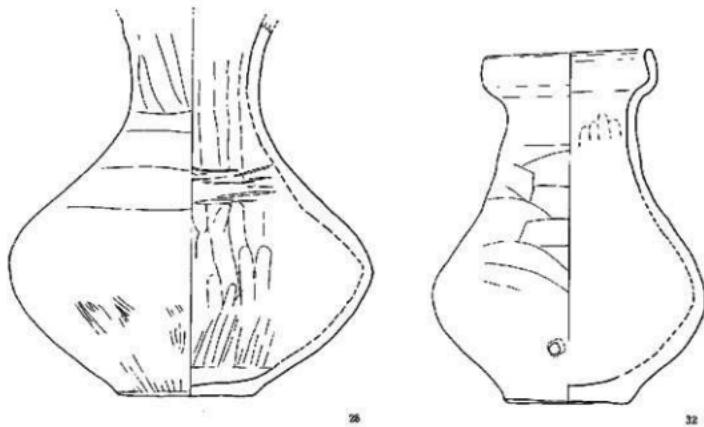
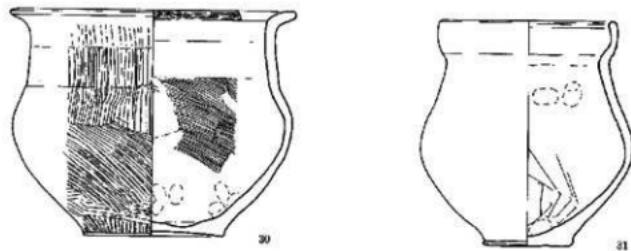
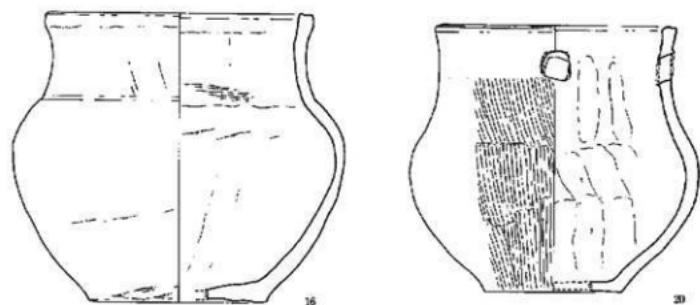


Fig.10 井戸14(山土) 基盤実測図 1 (1:6, 1:3)



0 10cm

Fig.11 井戸14出土土器実測図2 (1:3)

出土石器、石製品 (Fig. 13)

出土石器、石製品を Fig. 13 にまとめて掲げた。1001～1003は井戸14出土である。1001は棒状を呈する石器である。玄武岩製である。体部はよく研磨されている。下端部はやや薄くなり、叩打によってつぶれたようになっている。右斜のように用いた叩打具と考えられる。1002は磁石で、各面ともよく使われている。1003は石包丁である。穿孔部が研磨されておらず、穿孔時に削れたものかもしれない。1004は玄武岩製の石斧である。断面は杏仁形を呈する。ピット123出土。1005は滑石製の有孔円板である。ピット151出土である。

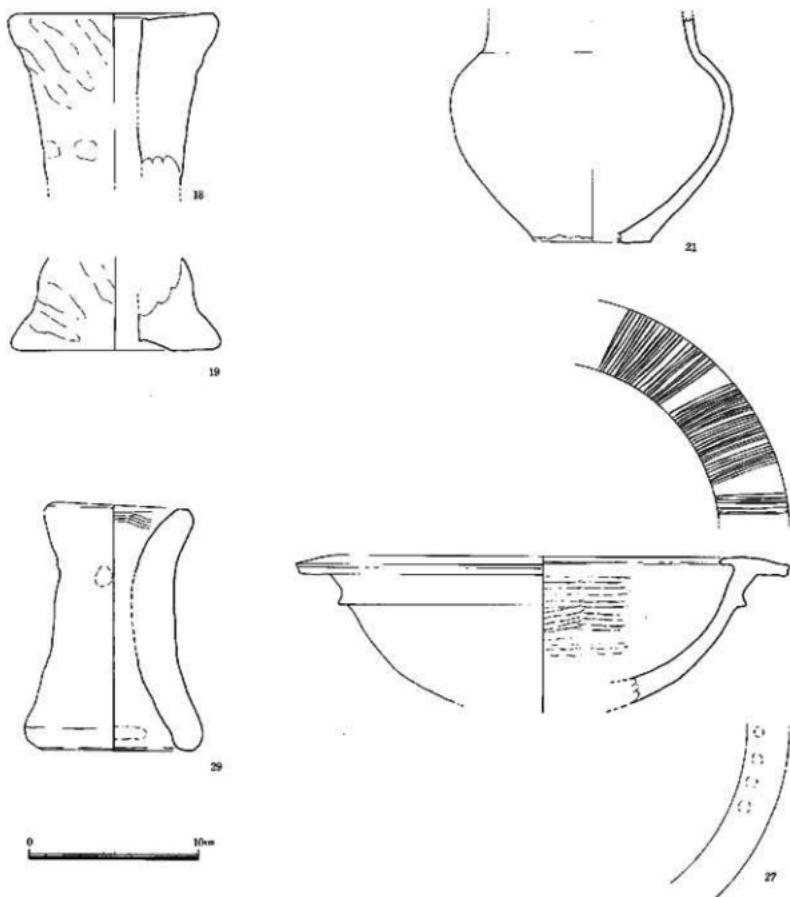


Fig. 12 井戸14出土土器実測図3 (1:3)

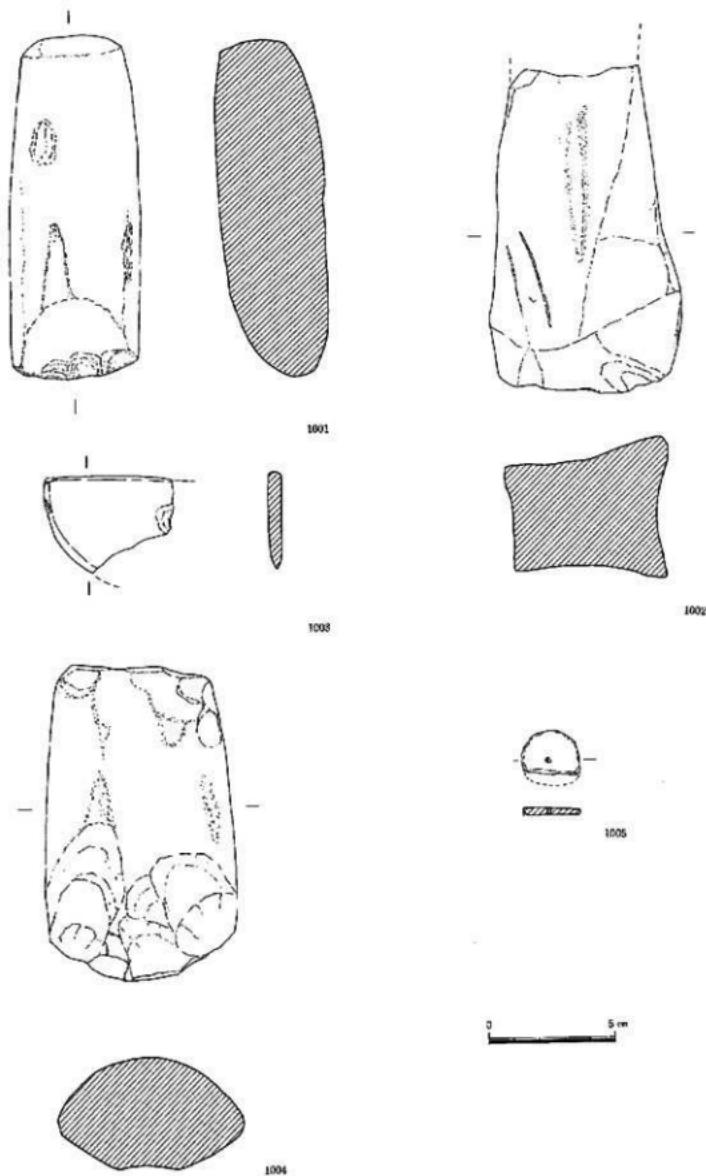


Fig.13 出土石器实测图 (1:2)

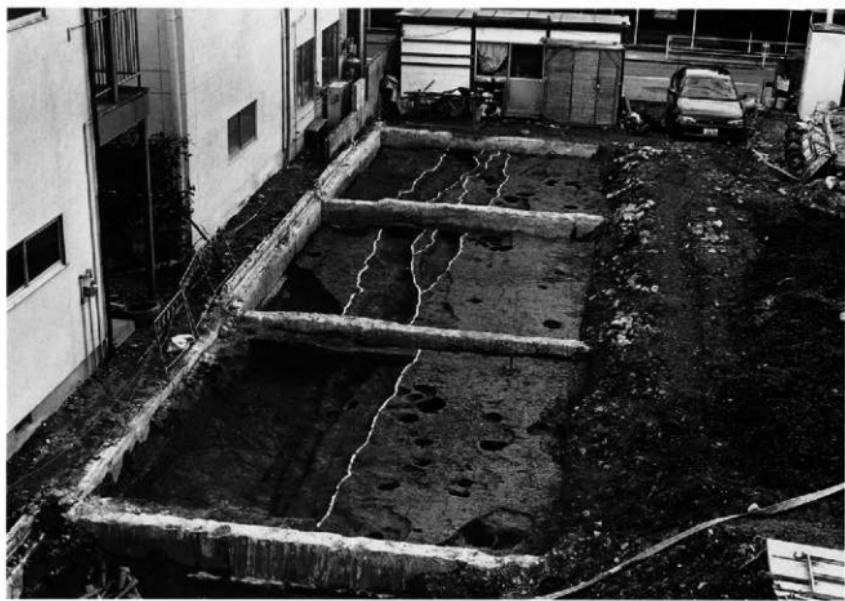
2. 小結

63次調査地点は、狭い面積ではあるが、いくつかの重要な成果を齎したと言えよう。以下、各時期ごとに簡単なまとめを述べておく。63次調査区地点で検出された遺構は、大きく三時期に分かれる。

第1期は弥生時代である。井戸14及び住居跡状遺構が該期にあたる。周辺の調査区では、東側50mの18次調査地点で高密度で検出されている。該期には比恵遺跡全体に稠密に遺構が広がっており、この大集落の南端付近に位置するものであろう。また調査区東方約80mに位置する46次調査地点では該期に掘削されたと考えられる大溝が検出されている。井戸14は弥生時代中期後半～木頃と考えられ、比恵遺跡では古段階の井戸である。

第2期は古墳時代前期初頭である。井戸13が該期にあたる。周辺では調査地点より西側で多く見られ、18次調査地点では該期の遺構は検出されていない。46次、62次では溝、住居跡等が検出されている。該期の集落は63次地点より西側に中心があつたものであろう。

第3期は奈良時代である。側溝と道路面からなる道路が検出された。この道路は官道の推定線から離れており、それに付随する小道の一つであろう。また比恵遺跡では奈良時代の官衙的建物はまだ見つかっていない。比恵遺跡では6世紀後半代頃に「那津官家」に比定されている掘立柱建物群が検出されているが、7世紀に入るとむしろ南側の那珂遺跡群に官衙的建物が移っていく状況が見られる。とくに比恵62次地点に近い那珂遺跡北端付近では、主軸を真北に向ける大形の掘立柱建物や、方形区画をなす溝が検出されている。これらの遺構群と鴻臚館方面へ向かう官道をつなぐ道路と考えられる。今後類似の遺構の検出例の増加が期待される。



(1)調査区西半区全景(南から)



(2)調査区西半区全景(北から)



(1)道路状遺構2(南から)



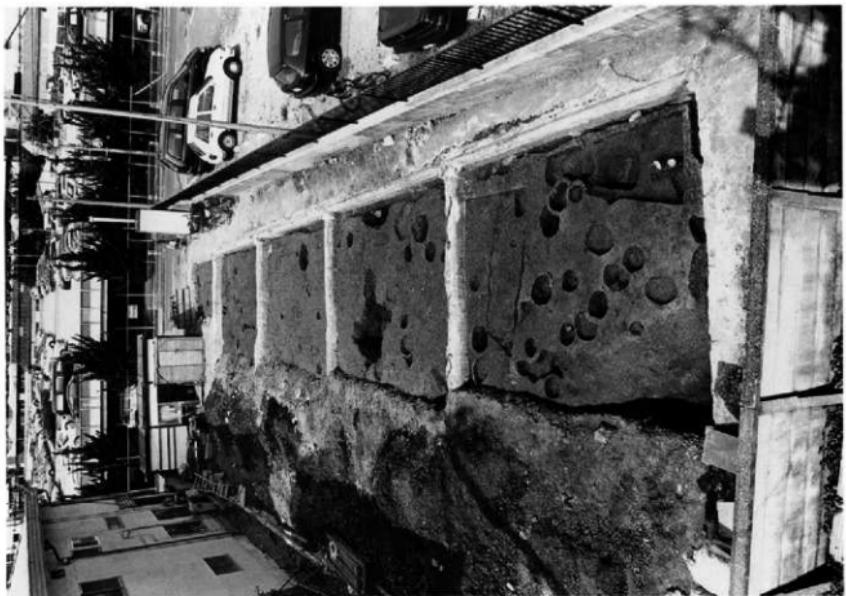
(2)道路状遺構2上層(北から)



(1)道路2、溝1土層(北から)



(2)溝土層(北から)



(2)調査区東半区全景(南から)



(1)調査区東半区全景(北から)



(1)住居跡遺構(東から)



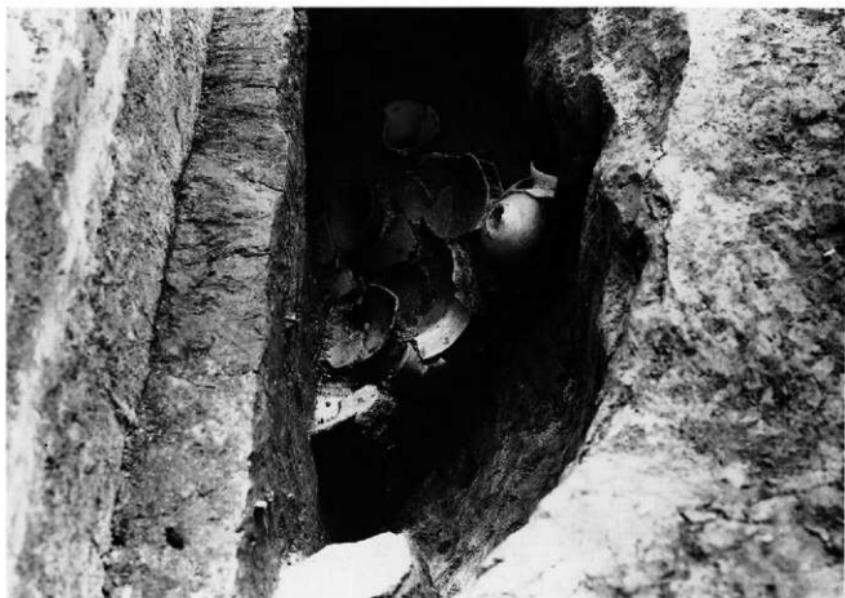
(2)住居跡遺構9遺物出土状況(東から)



(1) ピット142遺物出土状況(東から)



(2) 井戸14(東から)



(1)井戸14上部遺物出土状況(北から)



(2)井戸14下部遺物出土状況(東から)



井戸14土層(西から)

比恵遺跡群第65次発掘調査報告

遺跡略号 HIE-65
遺跡調査番号 9772

例　　言

1. 本章は福岡市博多区博多駅南5丁目10-7、10-15の倉庫建設に先立って、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成10(1998)年2月16日から平成10年3月2日にかけて発掘調査を実施した比恵遺跡群第65次調査の報告である。
2. 検出した遺構については、溝はSD、土塁はSKとし、それぞれに通し番号を付した。
3. 本章に掲載した遺構の実測は担当の井上蘗子、長家伸、写真撮影・製図は井上が行った。
4. 本章に掲載した遺物の実測・写真撮影・製図は井上が行った。
5. 本章の執筆・編集は井上が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	9772		遺跡略号	HIE-65	
調査地地番	福岡市博多区博多駅南5丁目10-7、10-15				
開発面積	180m ²	調査対象面積	180m ²	調査面積	97.9m ²
調査期間	1998年2月16日～3月2日			分布地図番号	37-0127

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1997年12月24日付けで、堀商事株式会社より倉庫増築に先立って埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが提出された。申請地は比恵遺跡群内に比定され、埋蔵文化財課では審査願いを受けて1998年1月27日に試掘調査を行った。その結果現地表下約60cmの鳥栖ローム上面に土壤や溝状遺構が検出された。この成果をもとに協議を行った結果、申請面積180m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。発掘調査は2月16日に着手し、3月2日に終了した。

2. 調査体制

調査委託 堀商事株式会社
調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊
調査統括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝(前) 柳田純一(現)
第2係長 山口誠治(現調査第2係長)
調査庶務 埋蔵文化財課第1係 河野淳美(前) 文化財整備課 谷口真由美(現)
調査担当 試掘調査 松村道博 屋山洋
発掘調査 井上龍子 長家伸
調査作業 池聖子 犬音輝子 小川博 草場恵子 久保山勝弘 小池温子 小路丸良江 小路丸嘉人
指原始子 出端名徳子 寺園恵美子 永田優子 村本義夫 安元尚子 柳瀬伸 吉川暢子
吉村智子 脇田栄
整理作業 大賀順子 坂井かおり 佐々木涼子 藤信子

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について堀商事株式会社の堤善吾氏をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝いたします。

II. 遺跡の位置と環境

比恵遺跡群の立地する福岡平野は御笠川と那珂川の沖積作用によって形成された沖積平野と、南北に延びる洪積丘陵により形成されている。平野北端部は博多湾に面し全面には砂丘が形成されている。比恵遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた洪積丘陵の北端部分に立地している。この丘陵は花崗岩の風化碎屑を基盤とし、その上部に粗砂・細砂・黒茶～褐色シルト・阿蘇山の火砕流による八女粘土・烏柄ロームが堆積し、比恵遺跡群では主にこの烏柄ローム上面で遺構が検出されている。現在では、戦前からの区画整理や都市開発の影響を受けて標高5～11mの平坦な地形を呈しているが、古くは台地を開拓する小河川により入り組んだ谷と台地という景観を成していたと考えられる。

比恵遺跡群では、戦前の篠山猛氏による調査をはじめとして今までに66次の調査が行われており、これまでに旧石器時代から古代にかけての各時期の遺構が確認されている。

本調査区は比恵遺跡群のやや中央西寄りに位置する。比恵遺跡群の中では調査地点の少ない地帯である。本調査区の西側に位置する47次調査地点では古墳時代前期の土壙などが検出されている。さらに北西には8次調査地点があり、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての遺構が検出され、特に古墳時代後期の大型掘立柱建物群は「那津官家」との関連が考えられている。北東には5・54・56・59次調査地点があり、5・59次調査地点では弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての集落、54・56次調査地点では弥生時代中期から後期前半までの集落が検出されている。このように本調査区の周辺地点では弥生時代中期以降古墳時代初頭までの集落が中心となる。

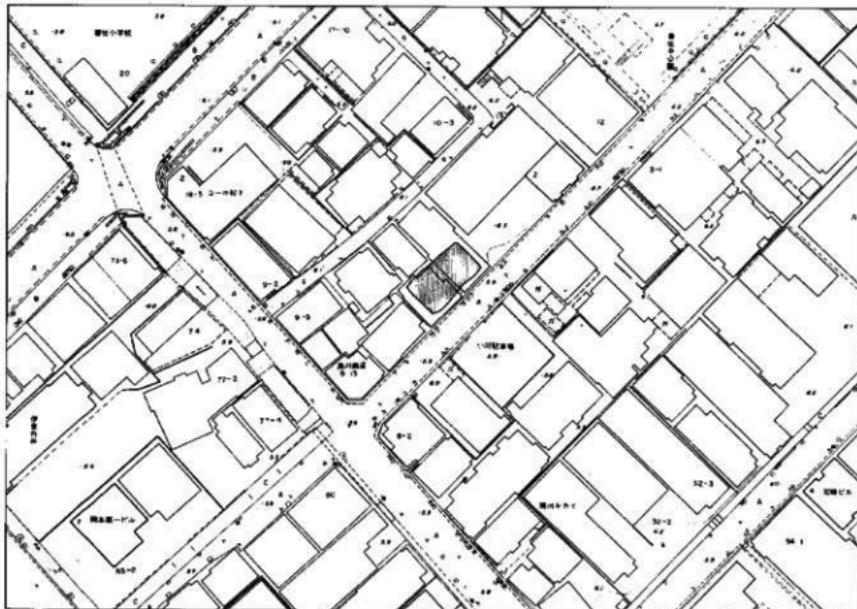


Fig. I 比恵遺跡65次調査地点位置図 (1:1,000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

比恵遺跡群第65次調査は1998年2月16日にバックホーによる表土剥ぎから始めた。残上の量が多く一度に遺構面を出すことができないため、まず調査区の南西半分の表土を剥ぎ取り遺構検出を行った。遺構面は現地表下60cm、標高約5mの鳥栖ローム層上面である。南西半分ではピット、土壤がごくわずか検出されたのみで、17日には北東半分の表土剥ぎを行った。北東半分は北に向かってローム層が急激に落ち、その上面に黒褐色粘質土層・灰白色シルト層・茶褐色包含層が堆積していた。台地の縁辺部に当たると思われる。8次調査地点でも北東方向にローム層が下降しておらず、本調査区の北東部から北西の方向に向かって谷が入る地形となるのであろう。ローム層・灰白色シルト層上面で溝2条、土壤、ピットが検出された。途中雨天が続き調査も滞りがちであったが26、27日で遺構実測、写真撮影を行い、3月2日に埋め戻しを行い調査を終了した。

2. 遺構と遺物

(1) 調査区上層

調査区南西側半分は地表下約60cm、標高5.2mでローム層が検出された。ローム層上部には耕作土が10cmほど堆積していた。これに対し、北東側半分は、ローム層が北東、特に北に向かって急激に落ちてゆきその上に黒褐色粘質土層・灰白色シルト層が堆積する。SD01、SD02、SK01は部分的に灰白色シルト層の上部から切り込んでいる。さらに調査区北東壁際に近い部分には上面に包含層である茶褐色土層が20cmほど堆積しており、弥生時代中期前葉から中期中葉にかけての甕、石包丁等が検出された。

(2) 検出遺構

SD01(Fig.2・3、PL.2-(1)・(2))

調査区北東半分のほぼ中央部で検出された。溝の北側の一部は灰白色シルト層の上部から切り込んでいる。南西から北東方向へ、やや北寄りに伸び、肩は緩やかに落ちる。幅1.3~2.2m、深さは20~30cmとかなり浅い。また、この溝は南北方向に続かず、途中で切れたような形状を呈するが、この遺構面そのものが削平を受けており、溝自体はまだ深く、南北方向に伸びていたと推測される。遺物は多量に検出された。中期初頭から中葉を中心とする、壺、壺、高杯、器台、石包丁、石製勾玉等が出土している。

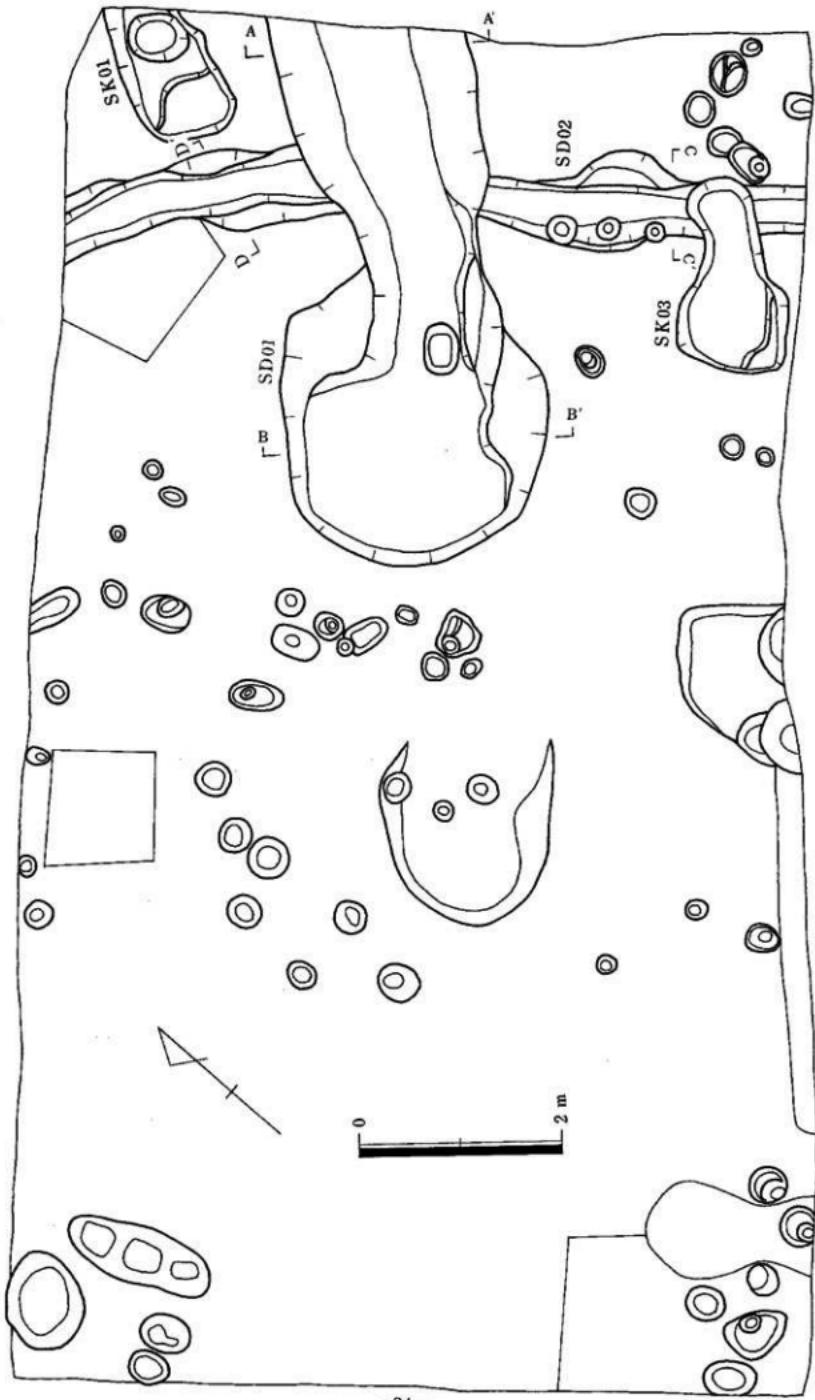
S D02(Fig.2・3、PL.2-(3)~(5))

調査区北東壁際に平行して伸びる。SD01と同じく、溝の北側は灰白色シルト層の上面から切り込んでいる。SD01に切られ、ほぼ直行して交わる。幅40~90cm、深さ40~80cmであり、底部付近はほぼ垂直に落ちる。部分的に肩がY字形に開いている部分があり、本来はY字形を呈する溝であったことが推察される。上部は削平を受けたのであろう。SD02からは遺物はほとんど検出されなかつた。

SK01(Fig.4、PL.3-(1))

調査区北コーナーの灰白色シルト層上面で検出された。長方形に近い橢円形を呈し、一部調査区外

Fig.2 調查区遺構配置図 (1:50)



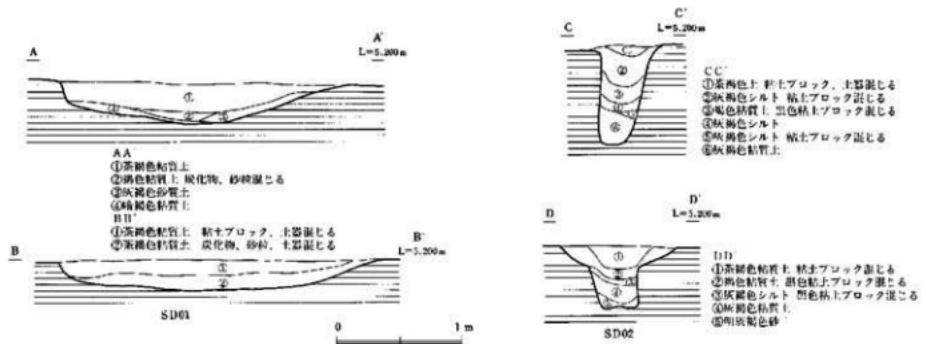


Fig. 3 SD01, SD02 土層断面図 (1:40)

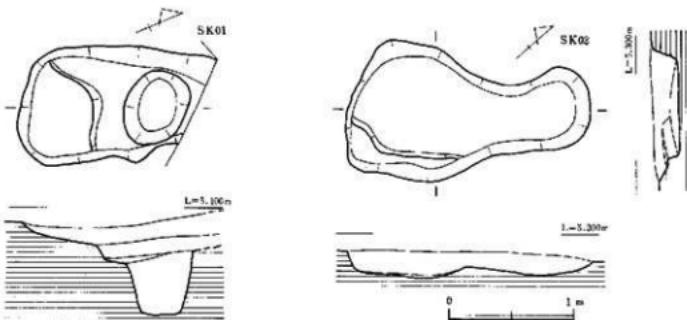


Fig. 4 SK01, SK03 遺構実測図 (1:40)

にかかるが、現長150cm、幅90cm、深さ15~70cmを測る。底部には柱状の掘り込みがあり、柱穴である可能性も多い。弥生時代中期初頭から中葉にかけての甕等が出土している。

S K03(Fig. 4)

調査区東コーナー付近、SD02を切って位置している。長さ190cm、最大幅90cm、深さは20cmほどでさほど深い土壤ではない。SD02の広がりである可能性もあるが比較的上部で検出されたため土壤としておく。遺物はかなり出土した。前期終末から中期中葉頃にかけての甕、壺等が出土している。

(3) 出土遺物

SD01出土土器(Fig. 5, PL. 4)

甕、壺、高杯、器台が出土している。1~15は甕である。1は口縁部に刻み目を施し口縁下に二条の断面三角形突帯を巡らす。外面はハケメ及びナデ、内面はナデで調整しており、明黄褐色ないし灰黄褐色を呈す。金雲母を含む。2は断面が勧先状の口縁部を持ち、口縁下に一条薄い突帯を巡らす。金雲母、カクセン石を含み明赤褐色を呈す。3も勧先状口縁部に二条の突帯を口縁下に巡らし、金雲母を含み黄褐色を呈す。4、5、6は逆L字型の口縁部を持つ。4、6は明赤褐色、5は黄褐色を呈す。6は金雲母を含む。7、8は断面三角形に近い口縁部がつき、肩部はきわめて薄い。黄褐色ないし淡赤褐色を呈し、金雲母を含む。ハケメ調整を施す。9はやや緩やかにカーブする肩部に若干厚めの上

げ底がつく。灰褐色を呈し、金雲母を含む。ハケメ調整を施す。10は裾がやや広がる厚めの上げ底である。赤褐色を呈し、ハケメを施す。11、13、15はいずれも上げ底を呈す。11、13は明赤褐色、13は黄褐色を呈し、金雲母を含む。12、14は平底に近い。明赤褐色を呈し、金雲母を含む。16はおそらく壺の底部と思われるが、平底で黄褐色を呈す。17～19は壺の口縁部である。直線的に立ち上がる頸部から口縁部が緩くカーブして開き胸部は大きく膨らむ。摩耗が激しいが、頸部にミガキが施されていたと思われる。黄～赤褐色を呈し、金雲母を含む。18、19は頸部から錐先状口縁部にかけて大きく聞く。18は暗赤褐色を呈し、金雲母を含む。19は淡黄褐色を呈す。20は高杯の脚部である。脚部がひの字形に聞く。黄～赤褐色を呈し、外面にハケメを施す。金雲母含む。21～23は器台である。21は赤褐色を呈し、金雲母、カクセン石を含む。ナデと指押さえで調整する。22は黄～赤褐色を呈し、金雲母、カクセン石を含む。23は赤褐色を呈し、金雲母を含む。

S D02出土土器(Fig. 6、PL. 5-29)

S D02の遺物は少ない。溝肩部の落ち込みからわずかに出土したのみである。29は壺の底部である。平底に近い上げ底で、外面にハケメを施し、黄～赤褐色を呈す。部分的に黒斑がみられる。金雲母、カクセン石を含む。

S K01(Fig. 6、PL. 5-24～28)

壺が出土している。24は口縁部端を内側に折り込むようにして作り出している。外面には縦方向にハケメを施す。外面は暗赤褐色、内面は白黄色を呈す。金雲母、カクセン石を含む。25は逆し字形の口縁部を呈し、外面にハケメを施す。外面にすすか付着し、内面は黄灰褐色を呈す。金雲母を含む。26は断面三角形の口縁部で、赤褐色を呈し、金雲母を含む。27は断面三角形の口縁部下に断面三角形の突帯を一条巡らす。淡赤褐色を呈し、金雲母を含む。28は厚めの上げ底で外面にハケメを施す。

S K03(Fig. 6、PL. 5-30～38)

壺、壺が出土している。30は壺の口縁部である。断面三角形の口縁部を持ち、胸部壁は薄く仕上げる。淡黄～赤褐色を呈し、金雲母を少量含む。31は壺の口縁部である。頸部から錐先状口縁部にかけてカーブして聞く。頸部にはハケメを施す。暗めの赤褐色を呈し、金雲母を含む。32～36は壺の底部である。32は腰の高い厚底で外面にハケメを施し、外面赤褐色、内面灰褐色を呈す。33、34は上げ底で、外面赤褐色を呈し、内面に黒斑が付着する。外面をハケメ調整する。金雲母を含む。35も上げ底で外面に細かなハケメ調整が施される。暗赤褐色を呈し、金雲母少量を含む。36は平底の底部から緩やかに胸部が立ち上がる。外面は黄褐色を呈し、黒斑がある。金雲母を含む。37、38は壺の底部である。37は平底で外面にミガキが施される。黄褐色を呈し、金雲母を含む。38は平底の底部から屈曲して胸部が聞く。淡赤褐色を呈すが、胎土は他の上器と異なり、精緻である。

包含層出土土器(Fig. 6、PL. 5-39～43)

調査区北東半分の遺構上面に堆積していた茶褐色包含層から壺などが出土している。39、40は逆し字形の口縁部からほぼ直線的に胸部が伸びる。39は外面にハケメを施し、外面黄褐色、内面淡赤褐色を呈す。40は外面口縁部直下に横方向、その下に縦方向のハケメを施す。淡赤褐色を呈す。

41は錐先状口縁部で淡赤褐色を呈し、金雲母を含む。42は逆し字形の口縁部から緩やかに胸部が聞く。淡黄褐色を呈し、金雲母を含む。43は壺底部である。平底で外面淡赤褐色、内面黄褐色を呈す。金雲母を含む。

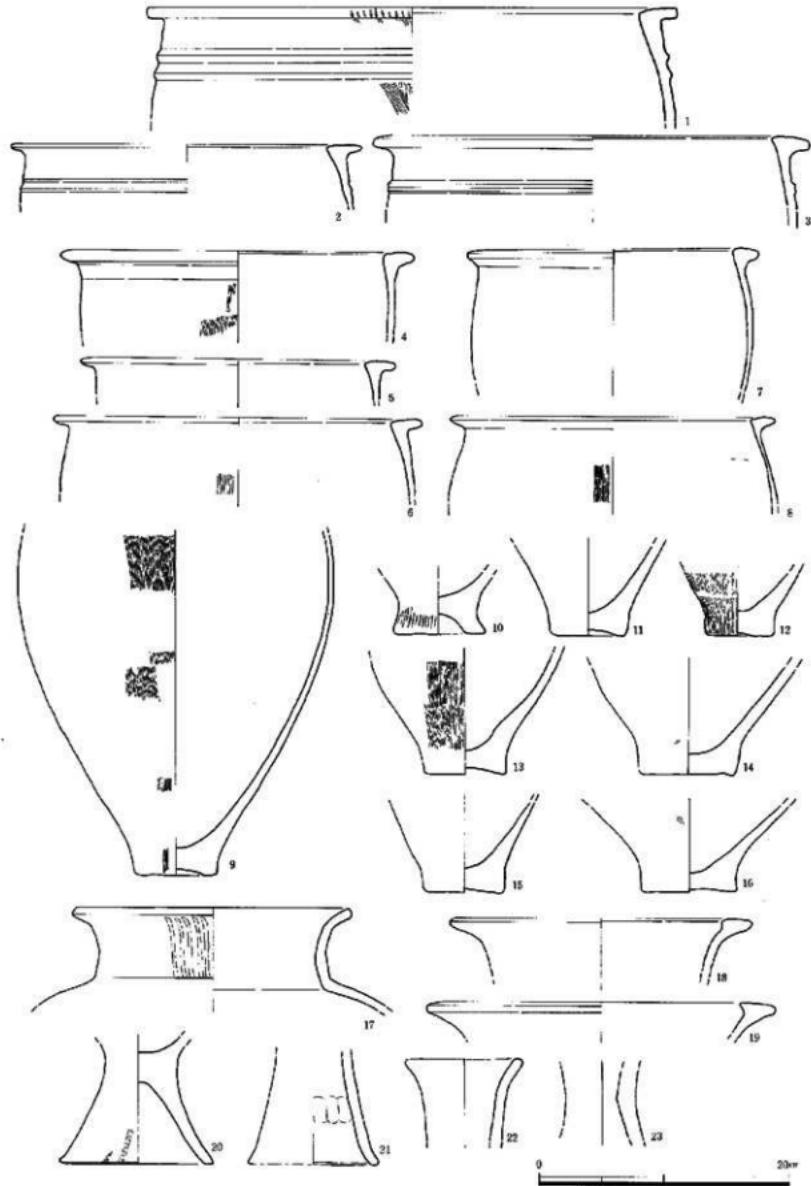


Fig.5 出土土器実測図1 (1:4)

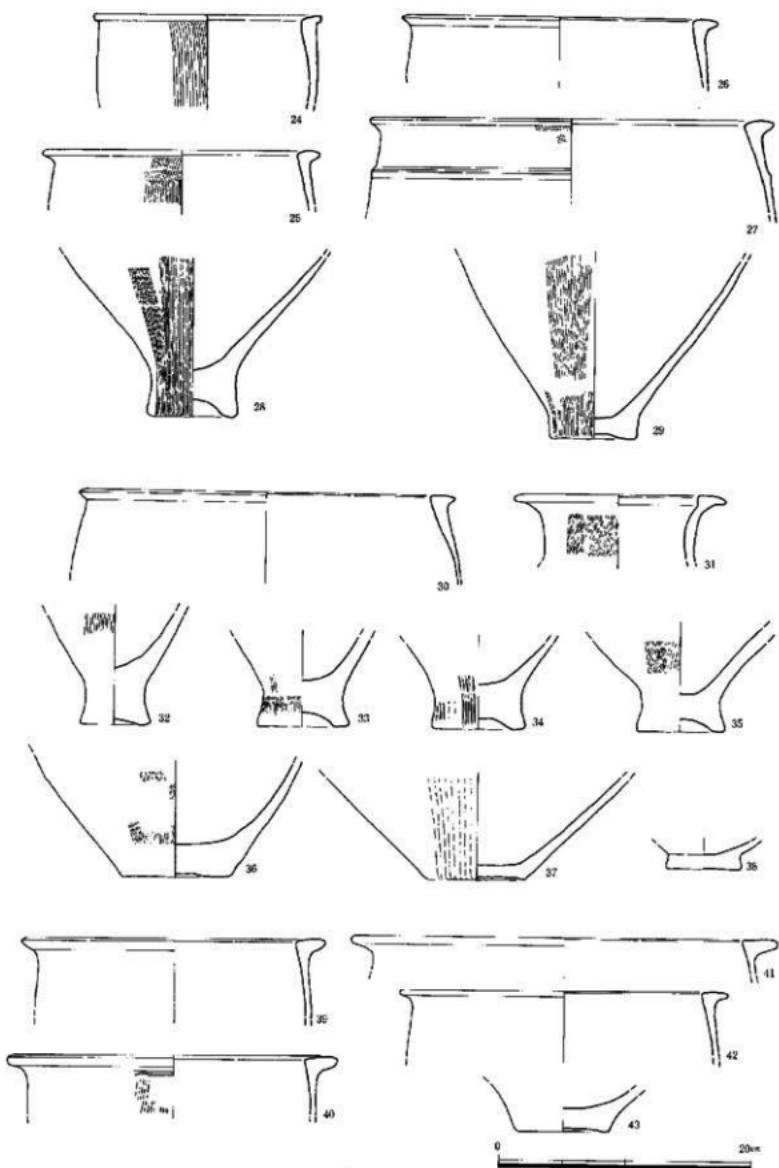


Fig.6 出土土器実測図2 (1:4)

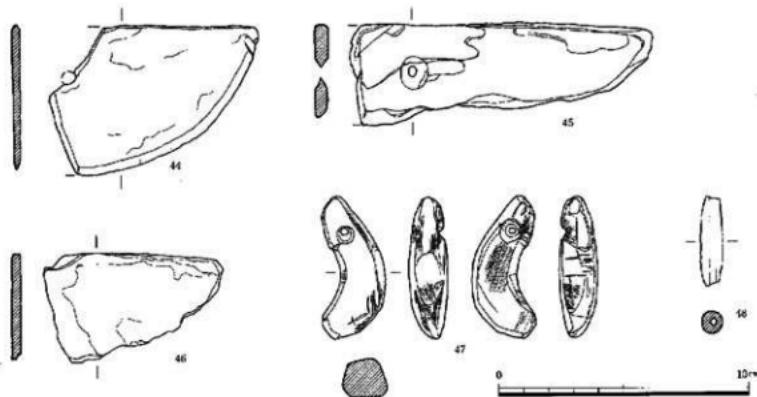


Fig. 7 出土石器・土製品実測図 (1:2)

石器・土製品(Fig. 7、PL. 5-44~48)

44~46は石包丁である。44、45は包含層からの出土である。摩耗が激しく、調整は明瞭でない。44は幅6cm、厚さ0.3cmである。45は穿孔部が残存する。幅4.1cm、厚さ0.5cmである。46はSD01からの出土である。幅4.3cm、厚さ0.3cmである。47は石製勾玉である。SD01から出土した。石材は滑石で、両面穿孔が施される。長さ5.6cm、幅1.8cmを測る。48はSD02出土の土錐である。長さ3.6cm、最大幅0.9cmを測る。

3. 小結

本調査地点では、ピット、土壤、溝2条が検出された。集落の一端を示すものであろう。ピットからは遺物が検出されず、特に建物としての性格を示すものはなかった。ロームが検出されている調査区南西半分は上面が削平を受けていると思われ、遺構が消失しているのである。

SK01は出土遺物から弥生時代中期前葉に比定されよう。SK03は中期前葉を中心とし、一部前期末まで逆上ると思われる。

北東半分において検出された溝はローム上面に堆積している灰白色シルト層上面から一部切り込まれており、台地の縁辺部を走ると推定される。そのうちSD01は深さ20cmほどの浅い溝であるが遺物が多量に出土している。土器の内容から、SD01は弥生時代中期前葉から中期中葉を中心とし、一部前期末まで逆上る時期に比定されよう。また、SD01からは滑石製勾玉が出土している。比恵遺跡群内ではこの時期に比定される石製勾玉は出土しておらず、溝の性格を検討する上で重要な資料になると思われる。SD01は南西側が削平で消失していると考えられるので、本来は調査区南西から北東方向に流れていたと思われる。さらにSD02は、断面がY字形を呈すしっかりした溝であるが、出土遺物がほとんどなく、わずかな遺物と切り合い関係からSD01やSK03ときほど変わらない時期と考えられる。遺構検出の段階ではSD02がSD01に切られていると考えられたが、両溝が機能していたのはほぼ同時期であろうと推定される。SD02はSD01に直行するように南東から北西方向に走る。

以上のように、本調査地点では弥生時代中期前葉から中葉を中心とした集落の一端が明らかとなつた。本調査地点の周辺は比恵遺跡群の空白地帯であり、これらの溝がどのように伸びていくのか、どのような性格を持つのか、今後の成果に期待したい。



(1)調査区南西側全景(北東から)



(2)調査区北東側全景(南西から)



(1)SD01 AA'セクション土層堆積状況



(2)SD01 BB'セクション土層堆積状況



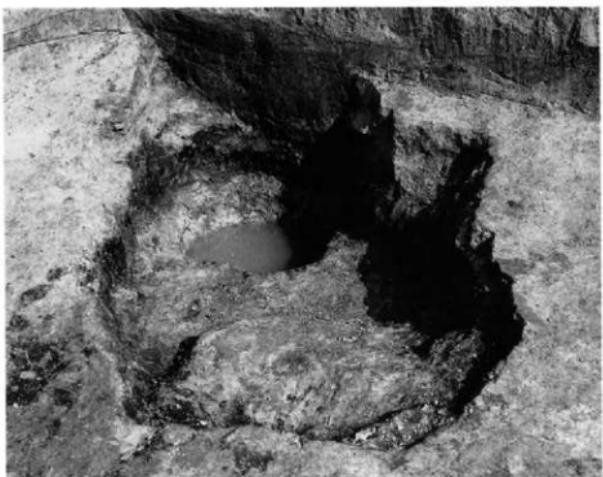
(3)SD02 (北西から)



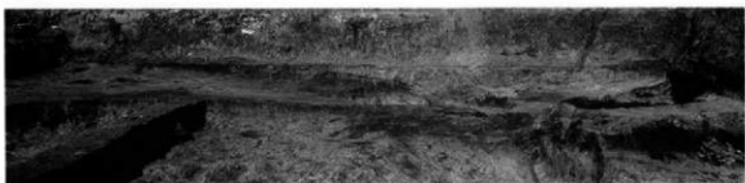
(4)SD02 CC'セクション土層堆積状況



(5)SD02 DD'セクション土層堆積状況



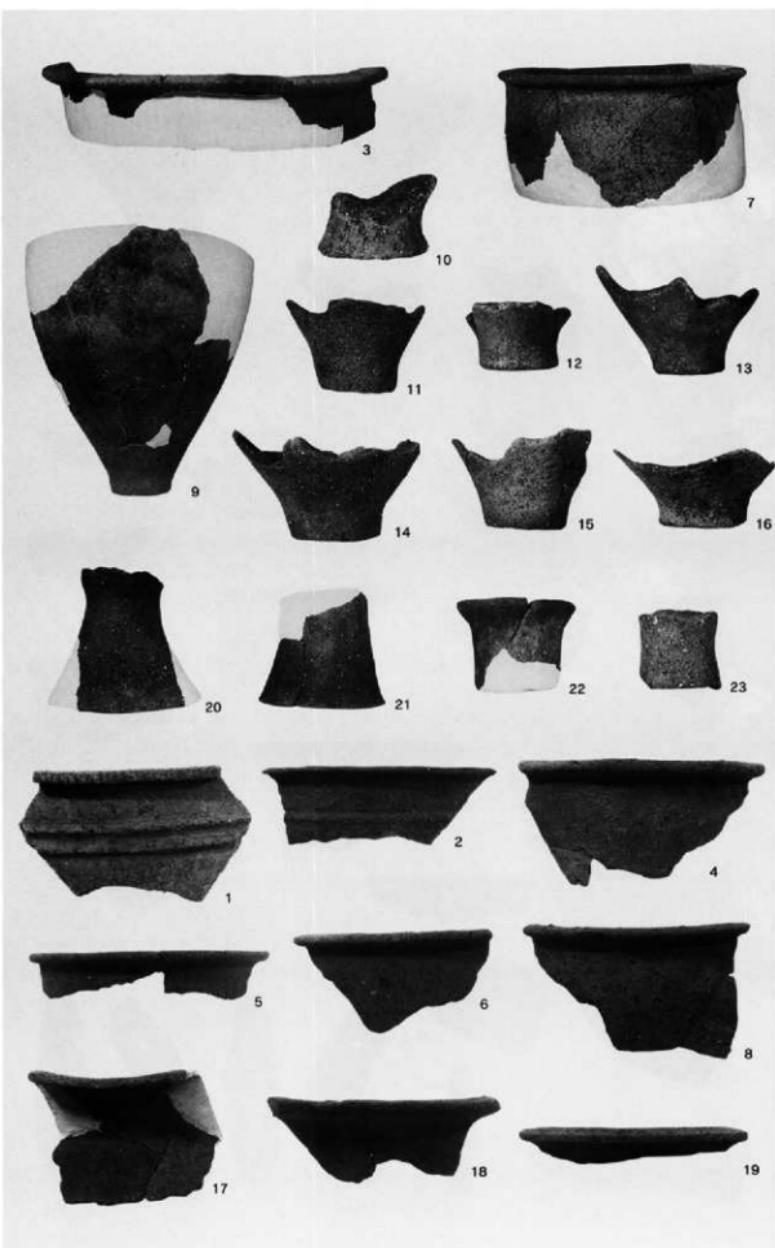
(1)SK01 (南から)



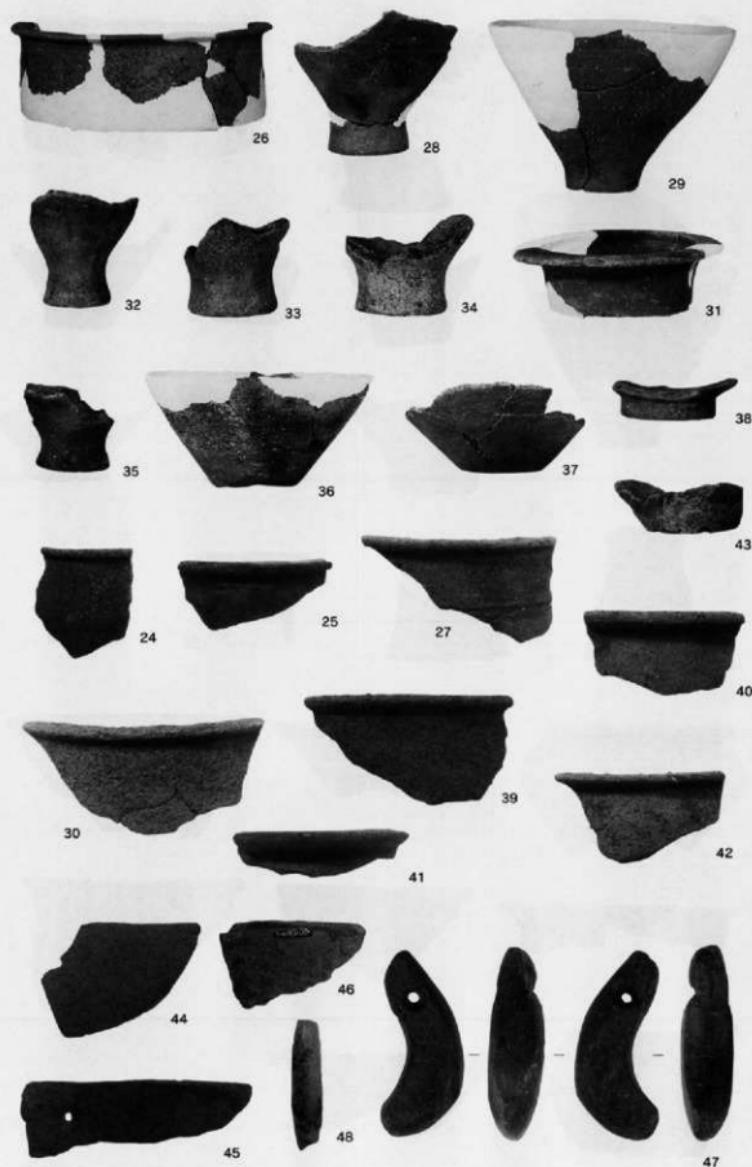
(2)調査区北西壁土層堆積状況



(3)調査作業をされた方々



出土遺物 I



出土遺物2

比 恵 27

福岡市埋蔵文化財調査報告書第595集

1999年(平成11年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
(092) 711-4667

印刷 川辺印刷有限会社
福岡市南区高宮1丁目7-19
(092) 521-4868

